平成12年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

奈良東耕地遺跡

2000

埼玉県熊谷市教育委員会

平成12年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

奈良東耕地遺跡

2000

埼玉県熊谷市教育委員会

5号（新）住居跡出土　灰釉椀

1号住居跡出土　鉄製紡錘車

序

私たちの郷土熊谷には、祖先が営々と築いてきた貴重な文化財が多数あります。なかでも、原始・古代の集落跡や古墳、中世の館跡等の埋蔵文化財が、広く分布することが知られています。

こうした文化財は、熊谷市の発展やその過程を物語る証であるとともに、子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市の創造のための礎としていかなければならないと考えております。

本書は、熊谷市農業活性化センターの建設に伴い、平成11年４月から５月に実施された、奈良東耕地遺跡発掘調査の成果をまとめたものです。今回の調査によって、平安時代に生活が営まれた遺跡であることが確認されました。中でも、鉄製の紡錘車や灰釉の坏など、貴重な資料が確認され、今まで不鮮明であった市内奈良地域の平安時代の生活を知る上で、重要な成果として注目されているところでございます。

本書を、文化財の記録の保存のみならず、郷土の歴史解明、学術研究の資料、あるいは学校教育や社会教育の参考資料として、広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、文化財保護法の趣旨をご理解いただき、発掘調査から本書の刊行に至るまで、ご協力をいただきました地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成12年９月

熊谷市教育委員会
教育長　**飯塚誠一郎**

例　言

1　本書は、埼玉県熊谷市大字中奈良897番地に所在する奈良東耕地遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、熊谷市農業活性化センター建設工事に伴う事前調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。

3　本事業の組織は、第Ⅰ章４のとおりである。

4　発掘調査期間は、平成11年４月12日から平成11年５月31日であり、整理報告書作成作業期間は、平成12年４月12日から平成12年９月30日である。

5　発掘調査は、寺社下博、市川康弘、小林貴郎、整理報告書作成作業は寺社下がそれぞれ担当した。

6　発掘の写真撮影は、寺社下、市川、小林が行い、遺物の写真撮影は、寺社下が行った。

7　出土品の整理及び図版の作成は、寺社下が行った。

8　本書の執筆は、寺社下が行った。

9　遺跡の基準点測量と航空写真は、㈱東京航業研究所に委託した。

10　本書の編集は、寺社下が行った。

11　本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管する。

12　本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。

（敬称略）

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、埼玉県立埋蔵文化財センター、

(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団、大里郡市文化財担当者会

凡　例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

1　各遺構の番号は、発掘調査時に付したものを、整理時に調査区の東から西へ・北から南への順序で付け直した。

2　遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりである。

遺構全測図 1/200　溝以外の遺構平面図及び遺構断面図 1/60　溝平面図 1/150　カマド平面図及び遺物出土状況平面図 1/30　基本土層図 1/40

3　遺構挿図中のスクリーントーン等は、原則として次の内容を示す。

地山　灰　焼土

4　遺構挿図中のレベル基準線は、標高27.500mで統一した。

5　遺構覆土の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・1998年版）に照らし、最も近似した色相を表示した。

6　遺物挿図の縮尺は、原則として1/4である。

7　遺物挿図中のスクリーントーンは、釉のかかった範囲を示す。

8　遺物の胎土は、肉眼で観察できる次のような包含物質について、多い順に示した。

①白色粒子　②黒色粒子　③赤色粒子　④片岩粒子　⑤白色針状物質　⑥礫

9　遺物の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・1998年版）に照らし、最も近似した色相を表示した。

目　次

口絵
序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1　調査に至る経過……1
　2　発掘調査の経過……1
　3　整理・報告書作成の経過……1
　4　発掘調査、整理・報告書刊行の組織……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
Ⅲ　遺跡の概要……8
　1　調査の方法……8
　2　検出された遺構……8
　3　検出された遺物……8
　4　基本土層……10
Ⅳ　遺構と遺物……11
　1　住居跡……11
　2　土坑……34
　3　溝……40
　4　ピット……43
Ⅴ　調査のまとめ……47

挿図目次

第１図　埼玉県の地形図……３
第２図　奈良東耕地遺跡周辺の遺跡分布図……５
第３図　奈良東耕地遺跡位置図……７
第４図　奈良東耕地遺跡遺構配置図……９
第５図　奈良東耕地遺跡基本土層図……10
第６図　１号住居跡……11
第７図　１号住居跡遺物出土状況……12
第８図　１号住居跡出土遺物……13
第９図　２号住居跡……14
第10図　２号住居跡出土遺物……15
第11図　３号住居跡及び遺物出土状況……16
第12図　３号住居跡カマド……17
第13図　３号住居跡出土遺物……17
第14図　４号住居跡……18
第15図　４号住居跡出土遺物……19
第16図　５号住居跡……20
第17図　５号住居跡遺物出土状況……22
第18図　５号住居跡出土遺物……24
第19図　６号住居跡……26
第20図　６号住居跡カマド……27
第21図　６号住居跡出土遺物……27
第22図　７号住居跡……28
第23図　７号住居跡カマド及び遺物出土状況……29
第24図　７号住居跡出土遺物①……30
第25図　７号住居跡出土遺物②……33
第26図　土坑①（１～９号）……35
第27図　土坑②（10～15号）……37
第28図　土坑③（16～22号）……39
第29図　溝（１～４号）……41
第30図　土坑・溝出土遺物……42
第31図　ピット①……45
第32図　ピット②……46

図版目次

図版１　遺跡航空写真（北より）
　　遺跡航空写真（西より）
図版２　調査開始前の状況（東より）
　　発掘調査風景
　　発掘調査風景
図版３　１号住居跡
　　２号住居跡
　　４号住居跡
図版４　１号住居跡鉄製紡錘車出土状況
　　１号住居跡鉄製刀子出土状況
　　１号住居跡鉄製刀子出土状況
図版５　３号住居跡
　　３号住居跡カマド
　　３号住居跡カマド周辺遺物出土状況
図版６　５号住居跡（新）
　　５号住居跡カマド（新）
　　５号住居跡灰釉（№２）出土状況
図版７　５号住居跡（旧）
　　５号住居跡カマド（旧）
　　ピット第２グループ
図版８　６号住居跡
　　６号住居跡カマド
　　ピット第４グループ
図版９　７号住居跡
　　７号住居跡遺物出土状況
　　７号住居跡環状鉄製品出土状況

図版10　７号住居跡カマド
７号住居跡カマド
７号住居跡カマド(煙道)
図版11　２号土坑
７・８号土坑
11号土坑
17・18・19号土坑
20号土坑
21号土坑
図版12　１・２・３号溝
４号溝
図版13　ピット第５グループ
14号土坑
15号土坑
38号ピット
図版14　出土遺物(１)
１号住居跡　No.２　須恵質椀
１号住居跡　No.４　須恵器椀
２号住居跡　No.１　土師質椀
２号住居跡　No.２　須恵器椀
３号住居跡　No.３　内黒椀
５号住居跡　No.２　灰釉杯
５号住居跡　No.３　灰釉皿
５号住居跡　No.７　土師質杯
図版15　出土遺物(２)
５号住居跡　No.８　土師質杯
５号住居跡　No.９　土師質杯
５号住居跡　No.10　土師質杯
５号住居跡　No.11　土師質杯
６号住居跡　No.１　須恵器椀
７号住居跡　No.１　須恵器杯
７号住居跡　No.７　須恵質椀
７号住居跡　No.８　須恵質椀
図版16　出土遺物(３)
７号住居跡　No.９　土師質椀
９号土坑　No.１　土師質杯
14号土坑　No.１　土師質杯
38号ピット　No.１　土師質椀
４号住居跡　No.２　灰釉壷
３号住居跡　No.４　土師器甕
図版17　出土遺物(４)
７号住居跡　No.12　土師器甕
７号住居跡　No.13　土師器甕
７号住居跡　No.15　土師器甕
７号住居跡　No.17　土師器甕
７号住居跡　No.18　土師器甕
７号住居跡　No.19　土師器甕
図版18　出土遺物(５)
１号住居跡　No.７　紡錘車
７号住居跡　馬歯
図版19　出土遺物(６)
７号住居跡　No.26　環状鉄製品
１号住居跡　No.８　刀子
１号住居跡　No.９　刀子
２号住居跡　No.３　刀子
図版20　出土遺物(７)
３号住居跡　No.６　鉄釘
３号住居跡　No.７　鉄釘
５号住居跡　No.20　鉄釘
５号住居跡　No.21　鉄釘
５号住居跡　No.22　鉄釘
38号ピット　No.２　鉄釘

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経過

平成11年１月11日、熊谷市経済部農政課長から熊谷市教育委員会教育長に、熊谷市大字中奈良仮2811番地１及び大字中奈良仮2810番地２地内の、面積2059㎡に及ぶ農業農村多元情報活用施設建設予定地内における文化財の所在及び取扱いについて協議があった。

この協議に対して、開発予定地が、現時点では埋蔵文化財の存在は確認されていないものの、遺跡の存在する可能性が非常に高い地域であり、詳細を確認するための試掘調査を実施する旨、平成11年１月12日付けで回答した。

そして、平成11年１月27日に試掘調査を実施した結果、平安時代を中心とした集落遺跡であることが確認された（奈良東耕地遺跡・遺跡番号59-119）ため、当該地は、現状で保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい旨、平成11年１月29日付けで回答した。

その後、保存策について協議を重ねたが、緊急性があり、工事の中止及び他所への変更は不可能である点が確認され、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。しかしながら、埋蔵文化財に影響を及ぼす工事範囲を最小限の800㎡にくいとめ、発掘調査は、この部分のみで実施することとした。

発掘調査は、平成11年４月１日、熊谷市と熊谷市教育委員会において農業農村多元情報活用施設・熊谷市農業活性化センター建設地内における埋蔵文化財に関する協定書を締結し、同年４月12日より実施することとなった。

発掘調査に先立って、熊谷市長から文化財保護法第57条の３第１項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が、熊農発第21号で提出された。これに対し埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について、教文第３－65号をもって、発掘調査実施の指示通知があった。

また熊谷市教育委員会教育長は、文化財保護法第98条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘の報告を、平成11年４月19日付熊教社発第78号で提出した。

2　発掘調査の経過

奈良東耕地遺跡の発掘調査は、平成11年４月12日から開始し、重機による遺構確認面までの削平、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、遺物取り上げ、実測、写真撮影と、一連の調査を繰り返し、同年５月31日に終了した。

調査対象面積は、遺跡面積11,500㎡のうち800㎡である。

3　整理・報告書作成の経過

整理・報告書作成作業は、平成12年４月12日から開始し、４月中に遺物の洗浄と注記、復元及び実測を完了した。５月に入り、遺構の図面と写真の整理、遺物写真撮影、遺構と遺物の版組みトレースを行っていった。その後６月には、写真図版作成、原稿執筆、割り付け等を行い、７月に印刷業者を決定した。入稿後、９月にわたって校正を行い、本報告書の刊行に至ったものである。

4　発掘調査、整理　　主体者　　熊谷市教育委員会
報告書刊行の組織

(1)　発掘調査（平成11年度）

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	坂巻篤
社会教育課長	氏家保男
副参事	浅野晴樹
課長補佐	北俊明
主幹兼係長	金子正之
主任	寺社下博
主任	渡辺操
主任	吉野健
主事	松田哲
発掘調査員	市川康弘
発掘調査員	小林貴郎
発掘調査員	越前谷理

(1)　整理調査（平成12年度）

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	野辺良雄
社会教育課長	浜島義雄
副参事	浅野晴樹
課長補佐	北俊明
主幹兼係長	金子正之
主査	浅見敦夫
主任	寺社下博
主任	吉野健
主事	松田哲
発掘調査員	小林貴郎
発掘調査員	越前谷理
発掘調査員	小野寺弘光

II　遺跡の立地と環境

遺跡の立地

奈良東耕地遺跡は、熊谷市大字中奈良仮2811番地１及び2810番地２他に所在し、ＪＲ高崎線熊谷駅の北約5.2kmに当たり、利根川から南へ約5.0km、荒川から北へ約5.4kmの、両河川のほぼ中間に位置している。

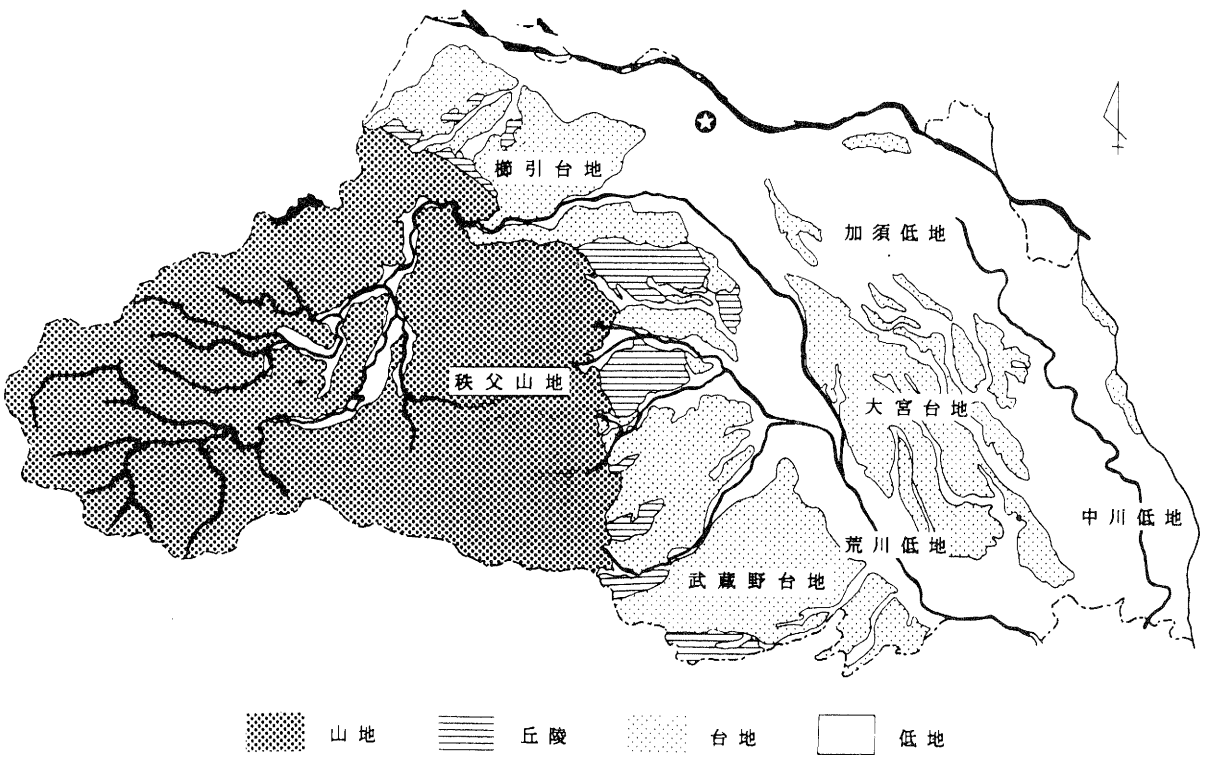
本遺跡の所在する奈良地区は、熊谷市の北部に当たり、利根川の南岸に広がる妻沼低地と、熊谷市の大半に及ぶ新荒川扇状地（沖積扇状地であり、熊谷低地と呼称されている）が相接している地である。

また、西から西南部にかけては、寄居町末野付近を扇頂として、洪積世に形成された荒川扇状地である櫛挽台地が広がっている（第１図）。

こうした地であるため、現況では麦畑あるいは水田として利用されている土地でもある。標高は28.4m前後である。

本遺跡は、まさにこの両低地の接する位置にあるため、両河川の氾濫等によって砂・シルト層が厚く堆積し、あるいは関東造盆地運動による地盤の沈降もあって、遺跡の発見が遅れた原因ともなっている。

さて、こうした土地の性格上、まだまだ知られていない例が多数存在することが予想されるが、現時点における本遺跡をとりまく歴史的環境について、古墳時代以降について、妻沼低地・熊谷低地を中心にみていくこととする。



第１図　埼玉県の地形図

遺跡の歴史的環境
（第２図）

古墳時代に入ると、前代に形成された低地帯での大規模な集落経営が継続され、増加・拡大されてくるようになる。

前期には、妻沼低地上に横間栗遺跡（38）を初めとして、根絡遺跡（37）、中耕地遺跡（47）、中条遺跡群内（３）の雷電遺跡、妻沼町の弥藤吾新田遺跡（57）の他、深谷市域にも東川端遺跡、明戸東遺跡（以上２遺跡、地図上未掲載）等、比較的大規模な集落が営まれる。また熊谷低地上でも、天神遺跡（８）北島遺跡（９）、天神東遺跡（11）、東沢遺跡（12）等、大規模な集落が営まれる。いずれも湧水地帯に隣接する地であり、後背湿地を控えた、初期稲作農業に適した地である、といえる。これらの遺跡のうち、北島遺跡、東沢遺跡等で農具が、雷電遺跡では、剣型等の滑石製模造品と共に、Ｓ字状口縁の台付甕、穿孔高杯・器台等が出土している。また、東川端遺跡、上敷免遺跡、行田市小敷田遺跡（以上３遺跡、地図上未掲載）では、方形周溝墓群が検出されており、東川端遺跡２号墓では、パレススタイルの大型壺を伴うことが確認されている。

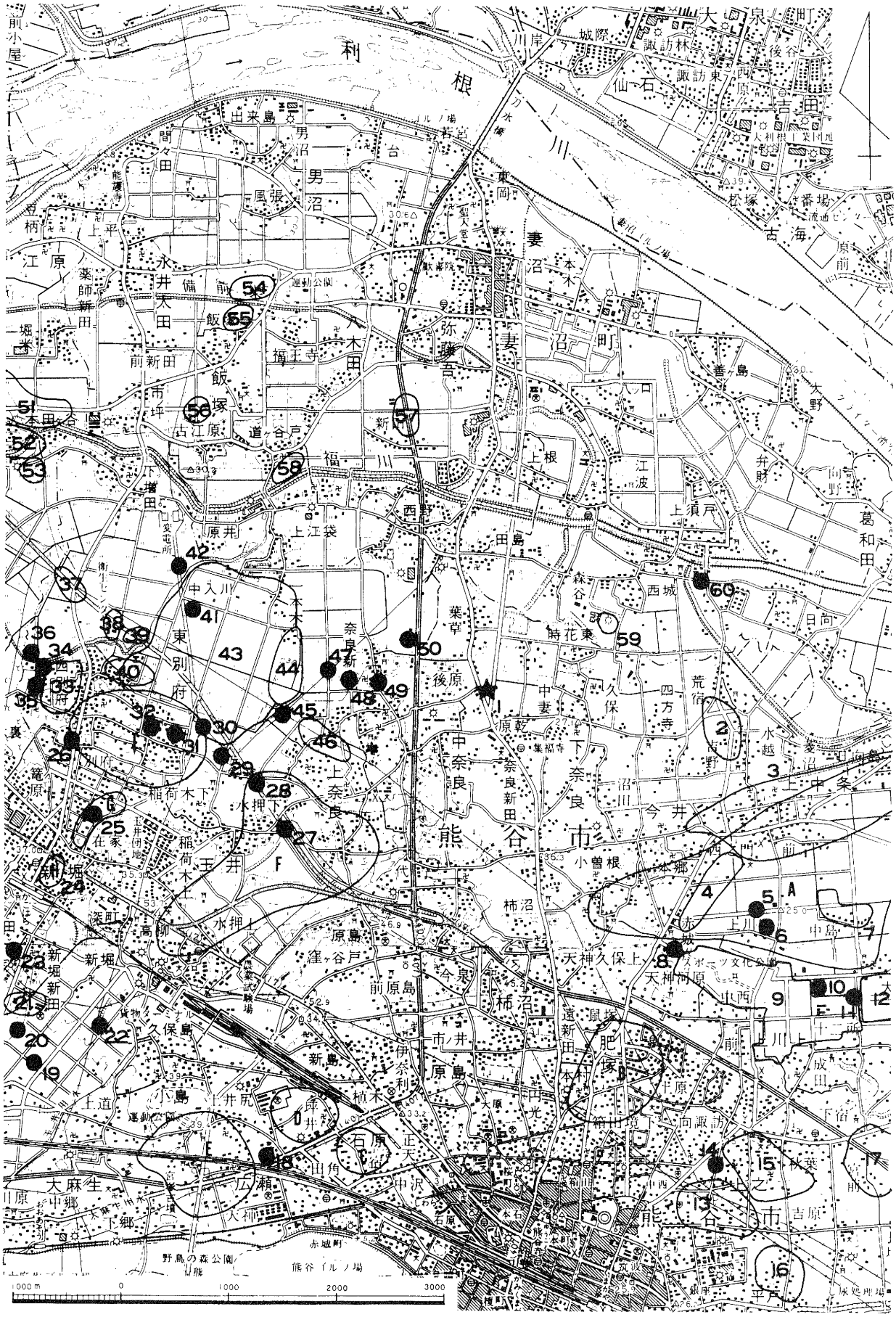
中期の遺跡は、前期の様相を踏襲しているようであるが、点在する傾向にあり、不詳な部分が多い。そんな中、妻沼低地と熊谷低地の接点地域である中条遺跡群内の権現山遺跡で出現期のカマドをもつ住居跡が検出され、また常光院東遺跡等でも遺構・遺物が検出されている。

後期に至ると、台地上あるいは低地の自然堤防上とを問わず、遺跡数は増大し、その規模も飛躍的に拡大してくる。また、その後継続して、奈良・平安時代まで集落が営まれるれる場合が多い。櫛挽台地東縁部及びそれに接する熊谷低地西端部では、樋の上遺跡（21）、下辻遺跡（20）を中心として、三尻中学遺跡、天王遺跡、上辻遺跡等（以上３遺跡、地図上未掲載）、大規模な遺跡が集中する様子をみせ、拠点となっていて可能性が伺える。

妻沼低地では、別府・奈良地域の拠点として、100軒以上の住居が検出されている一本木前遺跡（44）を中心とした、天神下遺跡（45）、根絡遺跡等の各遺跡が確認されている。このうち一本木前遺跡では、馬頭骨・滑石製模造品・土師器・須恵器を中心とした水辺出の土器祭祀が検出されており、注目される。西側にはこの後展開される、別府条里遺跡（43）が広がる。さらには妻沼町域においても、飯塚北遺跡（54）、飯塚南遺跡（56）、道ケ谷戸遺跡（58）等拠点となるべく遺跡が確認されている。

熊谷低地では、中条地域の拠点として、北島遺跡が前期から規模を拡大して展開されている。周囲には、光屋敷遺跡（２）、中島遺跡（７）、諏訪木遺跡（15）等、規模の大きな集落遺跡がみられ、当地域随一の規模をみせている。東側にはこの後展開される、中条条里東沢遺跡遺跡（12）が広がる。このうち諏訪木遺跡では、平安時代にかけて営々と水辺祭祀が行われ、馬頭骨・滑石製臼玉・腕輪・玉類・土師器・須恵器さらには斎串・人形・農具等の木製品等が検出されている。

このように、律令制度に組み込まれる前段階で、すでにその下地が出来上がっていた様相が見てとれるのである。



第２図　奈良東耕地遺跡周辺遺跡分布図

一方、当地の古墳も、妻沼低地と熊谷低地の境界線上に出現してくる。B種横刷毛の埴輪を有する横塚山古墳（50）を嚆矢とし、墓前祭祀を伴う鎧塚古墳、女塚１号墳をはじめとした中条古墳群（A）へと繋がる。そして埴輪祭祀の全盛を迎え、各所に古墳群がみられるようになる。その後、終末期に至ると、荒川旧流路脇に立地し、蕨手刀出土古墳や上円下方墳である宮塚古墳を含む広瀬古墳群（E）、櫛挽台地東北端部に立地する、小石室をもつ在家古墳群（G）、八角墳等多角形墳を含む籠原裏古墳群（H）等に集約されてくる。

こうした終末期古墳の築かれた櫛挽台地東北端部では、８世紀初頭に創建されたとされる西別府廃寺（35）が確認（９世紀初頭まで継続されたとされる）され、一大拠点を造り出していたと、考えられている。奈良時代から平安時代初頭に一大拠点を成す別府の、北に大集落（一本木前遺跡・平安時代まで継続・を中心とする）が造営され、さらには条里も展開されていたという状況は、容易にうなずけるものであり、新奈良川（荒川古流路）を挟んで東に隣接する『奈良』の地もまた、こうした一角を成すものと思われる。

また、広瀬古墳群の所在地は、武蔵国府から東山道武蔵路を北上し、荒川渡航直前の地であり、別府あるいは秩父・児玉方面への分岐点であったと推定される。そして、この地から北へ東山道武蔵路を約４km進んだ地に式内社・奈良神社（＊）が鎮座しているのである。

こうした地『奈良』に奈良東耕地遺跡は所在しているのである。

第２図掲載遺跡一覧・周辺の主要遺跡

＜熊谷市域＞

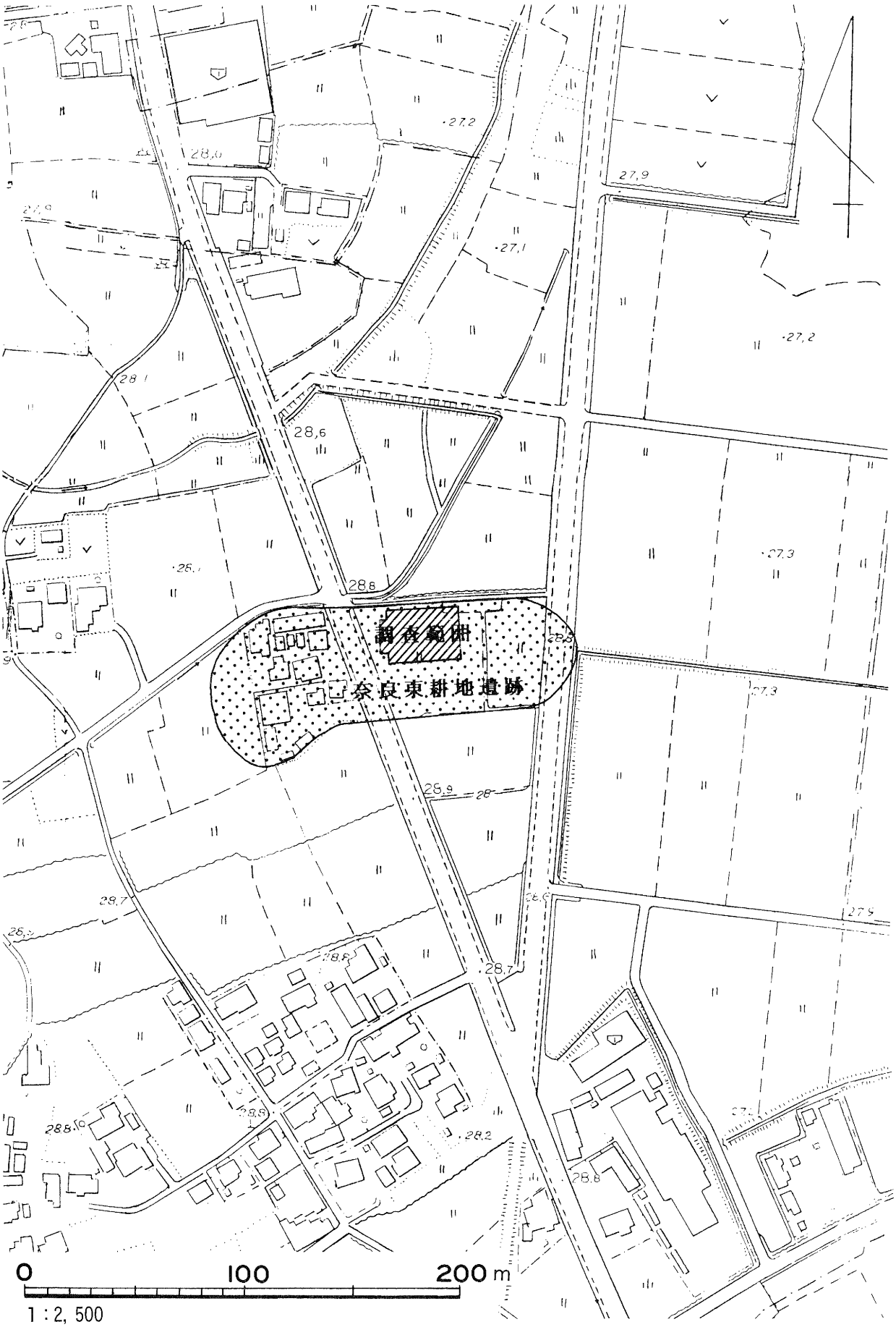
１奈良東耕地遺跡　２光屋敷遺跡　３中条遺跡群　４赤城遺跡　５女塚　４号墳　６女塚遺跡　７中島遺跡　８天神遺跡　９北島遺跡　10田谷遺跡　11天神東遺跡　12東沢遺跡　13前中西遺跡　14藤之宮遺跡　15諏訪木遺跡　16平戸遺跡　17池上遺跡　18不二ノ腰遺跡　19黒沢遺跡　20下辻遺跡　21樋の上遺跡　22東遺跡　23堂西遺跡　24籠原裏遺跡　25在家遺跡　26原遺跡　27水押下遺跡　28新ケ谷戸遺跡　29稲荷東遺跡　30寺東遺跡　31別府氏館跡　32別府城跡　33西別府館跡　34西方遺跡　35西別府廃寺　36西別府祭祀遺跡　37根絡遺跡　38横間栗遺跡　39関下遺跡　40石田遺跡　41深町遺跡　42入川遺跡　43別府条里遺跡　44一本木前遺跡　45天神下遺跡　46土用ケ谷戸遺跡　47中耕地遺跡　48西通遺跡　49東通遺跡　50横塚山古墳　A中条古墳群　B肥塚古墳群　C石原古墳群　D坪井古墳群　E広瀬古墳群　F玉井古墳群　G在家古墳群　H籠原裏古墳群　I別府古墳群　＊奈良神社

＜深谷市域＞

51城北遺跡　52居立遺跡　53前遺跡

＜妻沼町域＞

54飯塚北遺跡　55飯塚遺跡　56飯塚南遺跡　57弥藤吾新田遺跡　58道ケ谷戸遺跡　59鵜森入胎遺跡　60東城遺跡　J飯塚北古墳群



第３図　奈良東耕地遺跡位置図

Ⅲ　遺跡の概要

1　調査の方法

発掘調査は、試堀調査の結果を受けて、遺構確認面の上位約１ｍの土層を重機によって削除し、調査範囲全体の北東隅を基点として、一辺５ｍのグリッドを設定した。グリッドは、北東隅をＡ－０として、順次南へＢ・Ｃ・Ｄ……、西へ１・２・３……と呼称した。このうち、Ｃ－８ポイントを国家座標Ｘ＝20935.000、Ｙ＝-40750.000上に合わせて設定している。

調査区域は、概ね南北Ａ～Ｅグリッド、東西１～８グリッドの範囲に包含される。

その後、人力によって遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構の手掘りでの掘り下げを行った。途中、検出された土器等の遺物は、写真撮影・測量をした後、慎重に取り上げ、収納した。また遺構に対しても、掘り下げ途中で、必要に応じて、あるいは完掘時に写真撮影・測量を実施した。

なお遺構の測量は、グリッド基本杭を基準として、水糸による１ｍメッシュを設定する簡易遣り方の方法をとった。

そして、最後に遺跡全体の空中写真撮影を行い、本調査を完了した。

2　検出された遺構（第４図）

検出された遺構には、住居跡、土坑、溝、ピット等がある。また調査区域中央部には、攪乱坑（現地表面から掘り込まれたゴミ坑）が２ケ所穿たれている。

住居跡は、重複することなく、調査範囲全体に分散して、総数７基が検出されている。このうち１号及び７号住居跡は、一部が調査区域外に及んでいる。また２号及び４号住居跡は、北半部分が溝によって切断されている。

総数22基が検出された土坑も、住居跡同様、調査範囲全体に分散している。

溝は、４条検出されているが、いずれも調査区北端に集中重複しており、ほぼ東西行している。

ピットは、41基が検出されているが、大部分が４号住居跡周辺に集中して所在している。

3　検出された遺物

遺物は、大部分が住居跡から検出されており、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄製品、土錘、馬歯等が見られる。

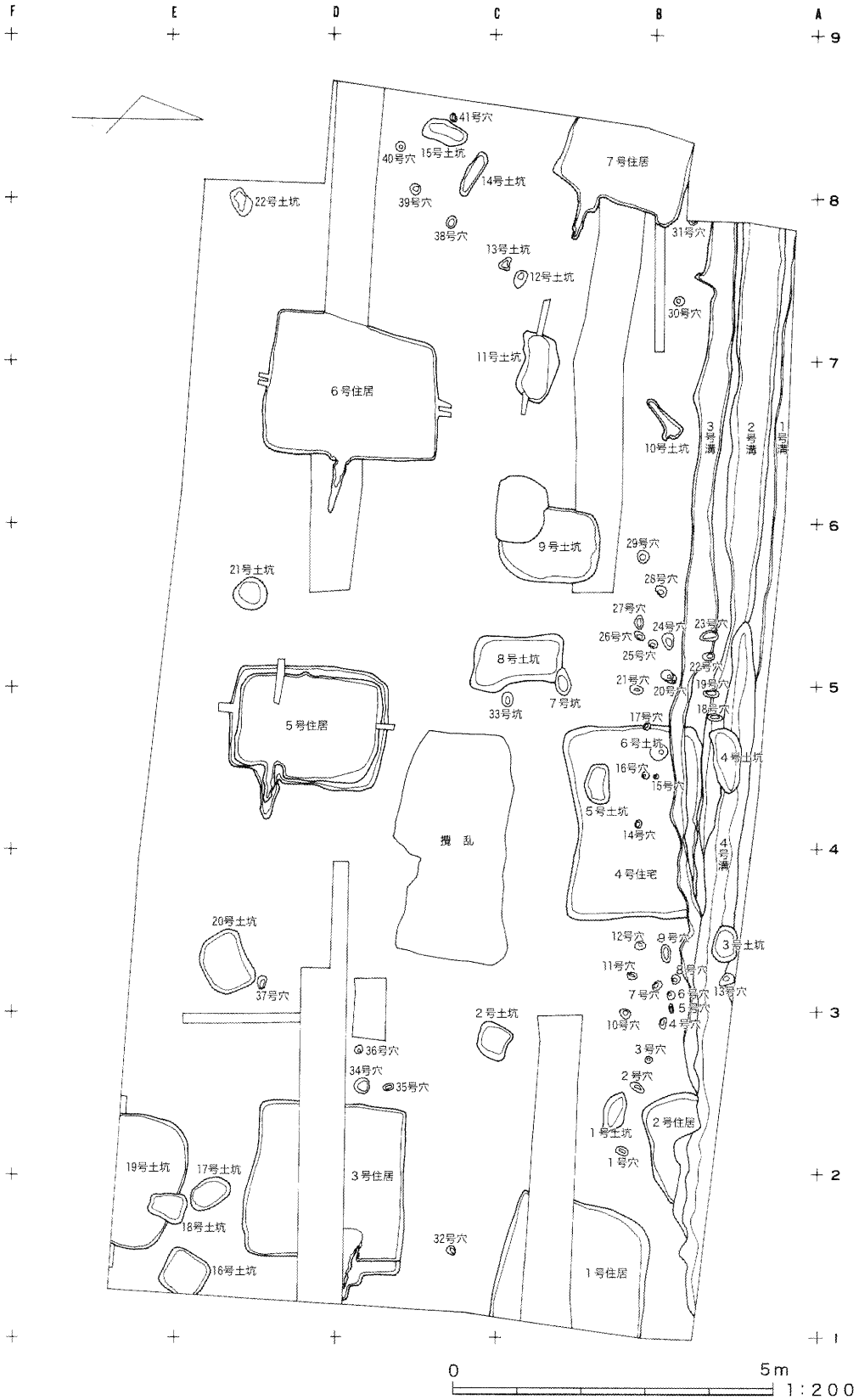
土師器は、甕が主体であるが、内黒処理を施した高台椀も見られる。

須恵器は、大部分が高台杯（椀）であるが、焼きがあまく土師質となっているものが多い。

灰釉陶器は、杯、椀、皿、壺等の器種が見られる。この中で５号住居跡出土の高台杯（５号住・№2）は、完形で検出されている。

緑釉陶器は、３号住居跡から杯の口縁が１片（３号住・№1）検出されたのみである。

鉄製品は、比較的残存状況が良く、紡錘車、刀子、釘等が検出されている。



第４図　奈良東耕地遺跡遺構配置図

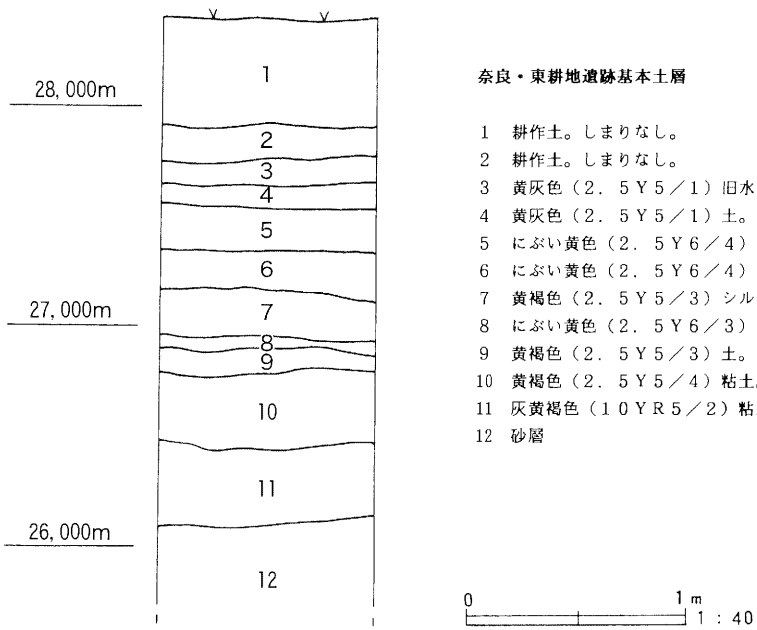
4　基本土層
（第５図）

現地表面の標高は、28.400m前後を計る。現況は麦畑であり、地表下65cmは耕作土となっている（１・２層）。耕作土下には、浅間Ａ火山灰を含む、厚さ10cmの粘性に富んだシルト質土層が堆積している。酸化鉄が縦筋を成し、旧水田耕作土であった様相を呈している（３層）。４層は、３層とほぼ同様であるが、酸化鉄がブロック状に点在し、旧水田耕作土の下面を成していたものとみられる。また４層は、厚さ10cm程で、溝の基盤層となっている。

５層～10層は、鈍い黄色もしくは黄褐色を呈する土層が相剋する。上層ほどシルト質が強く、下層へ移行するにしたがって粘性が強くなる。全体では、１ｍ10cm程の厚さをもつ。このうち特に、５層と６層の区別が困難であったが、５層中にわずかに砂が含まれていることを根拠として区別した。また、５層は住居跡群の基盤層、６層は住居跡群の覆土の主体層となっていたため、住居跡の平面プランの確認も困難であった。

11層は、粘性の強い灰黄褐色粘土層である。

12層は、砂層である。厚さ１ｍ以上の堆積をするものと思われるが、下面は確認されていない。



奈良・東耕地遺跡基本土層

1　耕作土。しまりなし。
2　耕作土。しまりなし。
3　黄灰色（２．５Ｙ５／１）旧水田土。粘性に富んだシルト質。火山灰混じる。
4　黄灰色（２．５Ｙ５／１）土。シルト質。しまりに欠ける。鉄分がブロック状に点在。
5　にぶい黄色（２．５Ｙ６／４）土。シルト質。砂が若干混じる。
6　にぶい黄色（２．５Ｙ６／４）シルト。
7　黄褐色（２．５Ｙ５／３）シルト。やや粘性有り。砂が若干混じる。
8　にぶい黄色（２．５Ｙ６／３）土。６層より粘性強い。
9　黄褐色（２．５Ｙ５／３）土。７層に近いが、７層よりやや粘性強い。
10　黄褐色（２．５Ｙ５／４）粘土。９層よりやや明るい色調。
11　灰黄褐色（１０ＹＲ５／２）粘土。粘性強い。
12　砂層

第５図　奈良東耕地遺跡基本土層図

Ⅳ　遺構と遺物

1　住居跡

住居跡は、重複することなく、調査範囲全体に分散して、総数７基が検出されている。東・北に所在するものから順次１号住居跡、２号住居跡、３号住居跡……と呼称した。このうち１号及び７号住居跡は、一部が調査区域外に及んでいる。また２号及び４号住居跡は、北半部分が溝によって切断されていることは、前に述べた通りである。

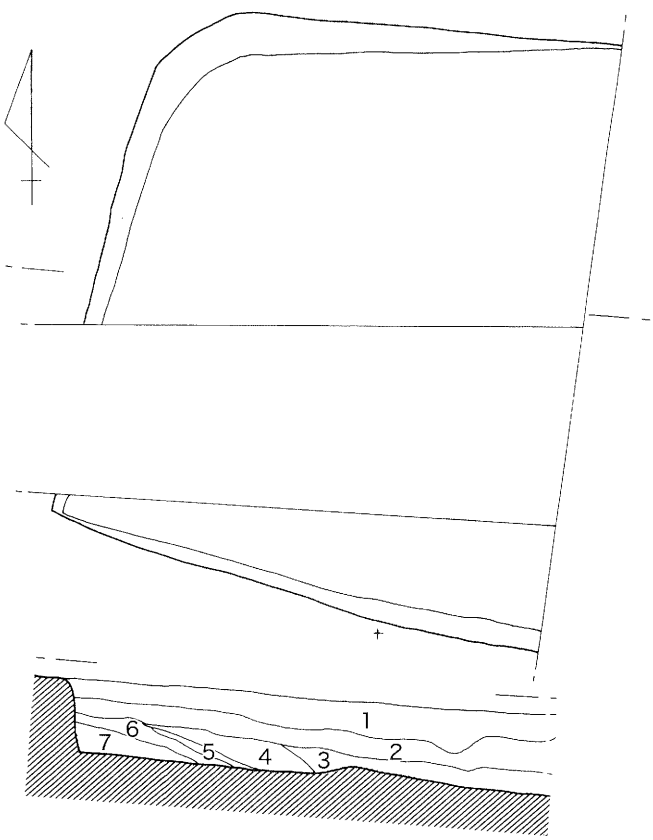
１号住居跡（第６図）

Ｂ－１グリッドに位置し、北辺部分がＡ－１グリッドに及ぶ。また東部分は、調査区域外に及んでいる。さらに中央部南側は、試掘トレンチによって掘り抜かれている。

このため、西辺は4.30mを計測できるものの、他は計測不能であり、全体の規模・形態は不明であるであるといわざるを得ない。しかしながら、西辺の両端の角度によると、平面は、方形を基本としたものと考えられる。

主軸方位は、Ｎ－100°－Ｅを示す。

覆土は、壁際に暗灰黄色シルト（７層）、褐灰色シルト（６層）、鈍い黄色土（５層）、鉄分を多く含む灰黄褐色砂質土（４層）が斜めに、焼土・炭化物を僅



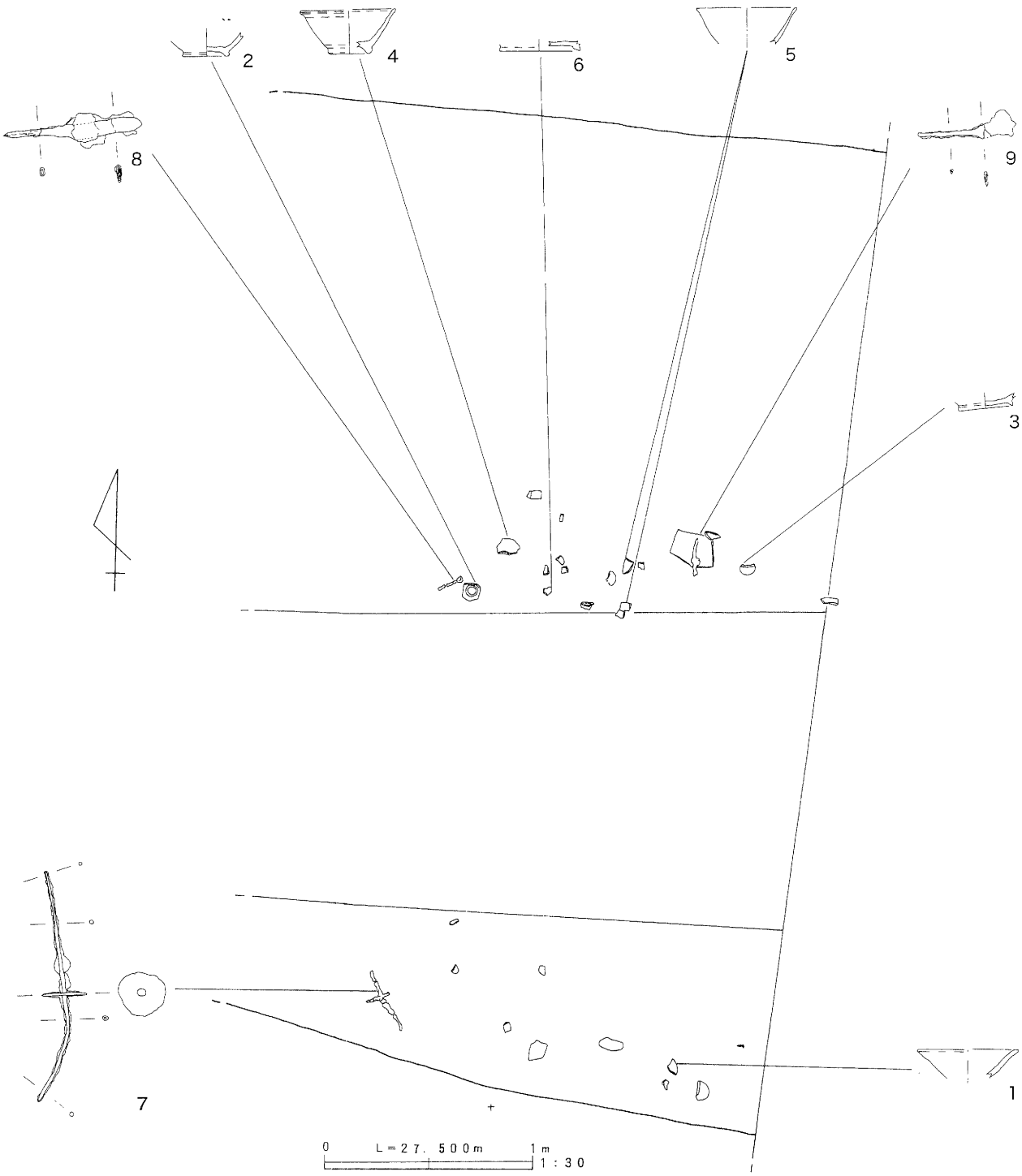
１号住居跡土層
1　にぶい黄色（２．５Ｙ６／４）シルト質土。
2　にぶい黄褐色（１０ＹＲ５／３）砂に近いシルト質土。砂が混じる。
3　黄褐色（２．５Ｙ５／３）砂に近いシルト質土。焼土・炭化物が微量混じる。
4　灰黄褐色（１０ＹＲ５／２）砂質土。ほとんど砂といってもよい。きめ細かく、鉄分を多く含む。
5　にぶい黄色（２．５Ｙ６／３）粘土質土。粘性強い。
6　褐灰色（１０ＹＲ５／１）シルト質土。砂が微量混じる。
7　暗灰黄色（２．５Ｙ５／２）シルト質土。しまりなし。

0　L＝27．500m　2m　1：60

第６図　１号住居跡

かに含む黄褐色シルト（３層）、鈍い黄褐色シルト（２層）、鈍い黄色シルト（１層）が水平に堆積している。

確認された３辺の壁は、ほぼ直線を成し、垂直に立ち上がる。床面は、ほぼ水平であるが、西側に１段の窪みをもつ。



第７図　１号住居跡遺物出土状況

カマドは、調査区域内では検出されていないが、他の住居跡同様、東壁に設置されていたものと考えられる。

遺物は、住居跡中央から南壁中央部にかけての床面上、３層中から集中して出土している（第７図）。

１号住居跡出土遺物（第８図）

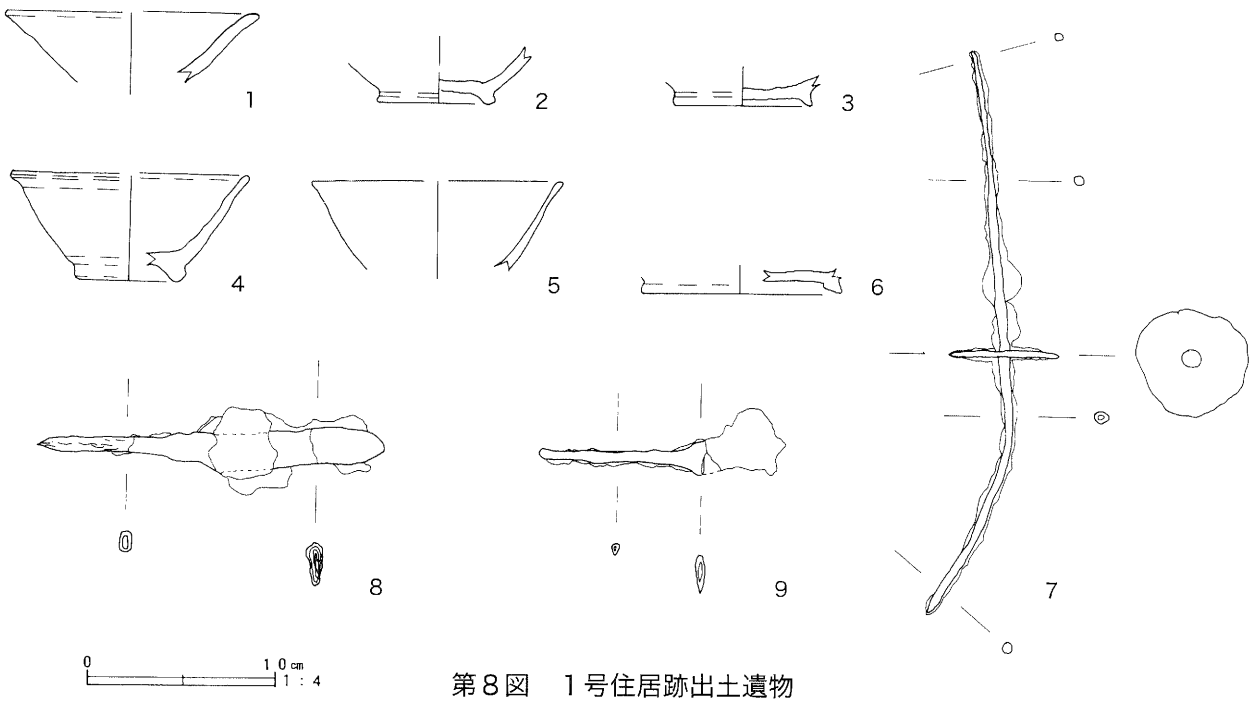
１は土師器杯である。上位１／３が残存し、推定口径13.3cmを計る。胎土には黒色、赤色、白色、片岩それぞれの粒子、および小礫を含み、マーブル状を呈する。焼成は普通で、橙（５ＹＲ６／８）色を呈する。口縁部は横ナデの後外面のみ横のナデが加わる。体部外面は斜めのナデが施される。

２は須恵質の高台椀である。底部付近のみが残存し、底径6.0cmを計る。胎土には、３～５mm大の礫、および白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、黒（10ＹＲ２／１）色を呈する。表面が剥離し、整形痕は不明である。高台の付着は雑である。

３は灰釉の高台杯である。底部のみが残存し、底径7.2cmを計る。胎土は細かく、白色、黒色それぞれの粒子を含む。焼成は良く、灰白（10ＹＲ８／１）色を呈する。内面は水拭き、外面は丁寧な高台の付着の後回転のナデ。一部に煤が付着する。

４は須恵器高台椀である。１／３が残存し、推定口径12.4cm、高さ5.5cm、推定底径5.2cmを計る。胎土には、３～５mm大の礫、および黒色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、灰白（2.5Ｙ８／１）色を呈する。表面が剥離し、整形痕は不詳であるが、ロクロ整形の後、ナデが加えられているようである。高台の付着は雑である。内面に炭化物が付着する。

５は須恵器杯である。上位１／３が残存し、推定口径13.1cmを計る。胎土には黒色、白色それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、褐灰（10ＹＲ６／１）色を



第８図　１号住居跡出土遺物

呈する。口縁部は横ナデの後横のナデが加わる。内面に炭化物が付着する。

６は灰釉の壺と思われる。底部１／４のみが残存し、推定底径10.4cmを計る。胎土は細かく、黒色、白色それぞれの粒子を含む。焼成は良く、灰白（Ｎ７／）色を呈する。内外面共回転のナデ。外面は丁寧な高台の付着の後回転のナデ。内外面の一部に吸炭。

７は鉄製の紡錘車である。中途で折れ曲がっているものの、ほぼ完存しており、全長は30.3cmを計る。軸の上端は鉤状を呈し、弾車の取り付け部に向けて太さを増す。断面は円形を成す。弾車はほぼ円形を成し、厚さ0.5cm、径5.6～5.9cmを計る。軸は、弾車の４cm下で折れ曲がっており、徐々に太さを減じている。

８は、鉄製の刀子である。全長は18.1cmを計る。茎には、木質が付着している。

９は、鉄製の刀子である。全長は13.2cmを計る。

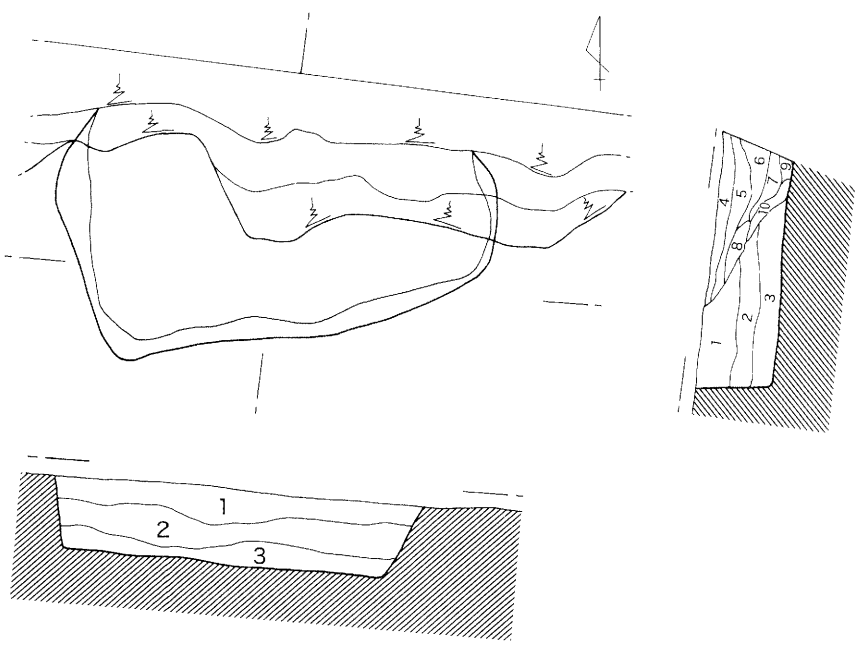
２号住居跡
（第９図）

Ａ－１からＡ－２グリッドに位置し、北半部分は４号溝によって削除されている。

このため、南辺は3.20mを計測できるものの、他は計測不能であり、全体の規模・形態は不明であるであるといわざるを得ない。しかしながら、西辺の両端の角度によると、平面は、方形を基本としたものと考えられる。

主軸方位は、Ｎ－80°－Ｅを示す。

覆土は、上層から灰黄褐色シルトをブロック状に多量に含む鈍い黄色シルト（１層）、砂を混在する暗灰黄色シルト（２層）、鉄分を多く含み砂をブロック



２号住居跡土層
1　にぶい黄色（２．５Ｙ６／４）シルト質土。灰黄褐色（１０ＹＲ４／２）のブロックが多量に混じる。
2　暗灰黄色（２．５Ｙ５／２）シルト質土。やや粘性強い。砂が混じる。
3　にぶい黄褐色（１０ＹＲ４／３）粘土に近いシルト質土。酸化鉄を多く含んだ砂が、ブロック状に混入する。
4　にぶい黄褐色（１０ＹＲ５／３）シルト質土。
5　灰黄褐色（１０ＹＲ４／２）シルト質土。
6　にぶい黄褐色（１０ＹＲ４／３）シルト質土。やや粘性強い。
7　黒褐色（１０ＹＲ３／２）シルト質土。６層より粘性強い。
8　灰黄褐色（１０ＹＲ４／２）シルト質土。５層に比べややしまった感じ。礫石が混じる。
9　にぶい黄褐色（１０ＹＲ４／３）粘土質土。
10　暗褐色（１０ＹＲ３／３）粘土質土。炭が微量混じる。

0　L＝27.500m　2m
1：60

第９図　２号住居跡

状に混在する鈍い黄褐色シルト（３層）が、ほぼ水平に堆積している。

カマドは、調査区域内では検出されていないが、他の住居跡同様、東壁に設置されていたものと考えられる。

壁は、３辺共に丸みをもち、僅かに緩斜面を成す。

床面は、ほぼ水平である。

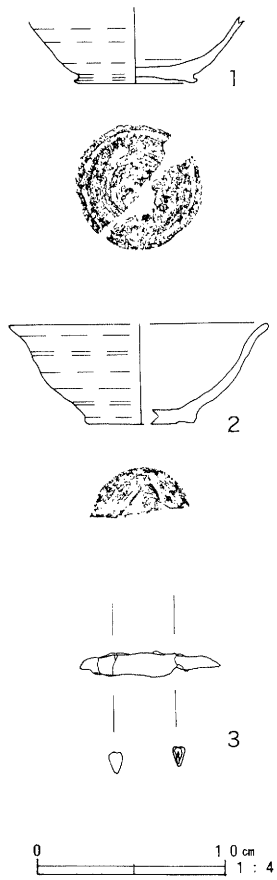
遺物は、覆土中から出土している。

２号住居跡出土遺物（第10図）

１は土師質の高台椀である。底部付近のみが残存し、底径6.6cmを計る。胎土には白色、赤色、黒色それぞれの粒子、および小礫を含む。焼成は悪く、灰褐（7.5ＹＲ５／２）色を呈する。体部内外面は横のナデが施される。底部は内面に押圧のナデ、外面は糸切の後付け高台。後周辺部ナデ付け。内外面共吸炭している。

２は須恵器椀である。１／３が残存し、推定口径13.8cm、高さ5.1cm、推定底径5.8cmを計る。胎土には、２mm大の礫、および黒色、赤色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、鈍い黄橙（10ＹＲ７／２）色を呈する。表面が剥離し、整形痕は不詳であるが、糸切痕のみ明瞭に観察できる。高台の有無は不明である。

３は鉄製の刀子である。残存長7.5cmを計る。



第10図　２号住居跡出土遺物

３号住居跡（第11図）

Ｄ－２ポイントを中心に、Ｃ－１・２、Ｄ－１・２グリッドに位置している。中央部分は試掘トレンチによって削除されている。

北辺は5.10m、西辺は4.70m、南辺は4.70m、東辺は4.95mを計測し、平面形は、ほぼ方形を呈する。

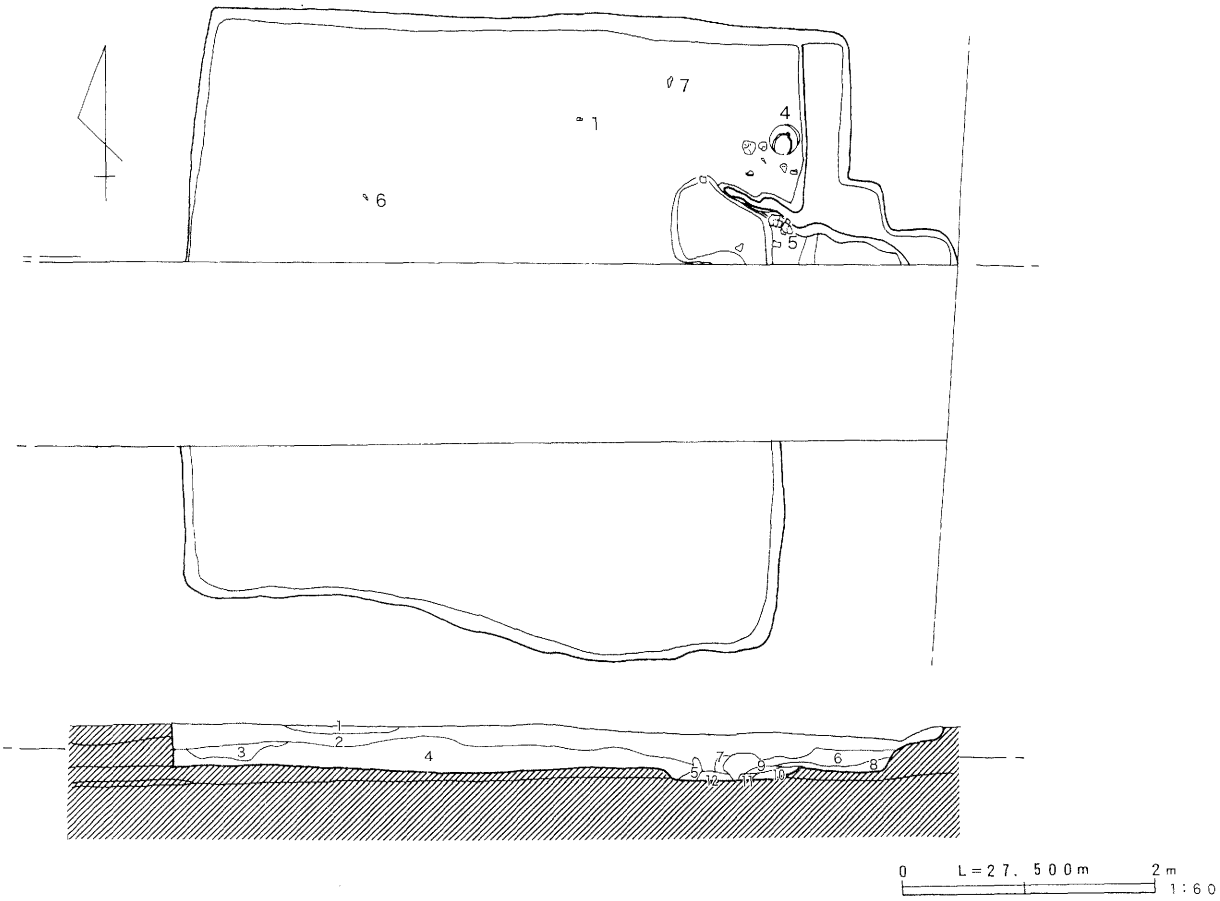
主軸方位は、Ｎ－92°－Ｅを示す。

覆土は、上層から、砂をブロック状に多量に含む鈍い黄橙色土（２層）、砂をブロック状に多量に含む黄橙色シルト（４層）であり、２層の上面に鉄分を含む灰白色土（１層）、４層の上面に鉄分を含む鈍い黄橙色土（３層）がレンズ状に堆積する部分もみられる。

壁は、南辺が蛇行するものの、他は直線を成し、ほぼ垂直に立ち上がる。カマドと北東隅の間は、東に張り出し、床面より１段高くなる。またこの張り出しは、使用されたカマドの奥部ではカマドの形態をとっている。

床面は、ほぼ水平である。

カマドは、東壁中央よりやや北寄りに設置されている（第12図）。床面より１段低く燃焼が広がる。燃焼部は、分銅型を呈し、主軸線上で83cmの長さをも



3号住居跡土層

1　灰白色（5Y8／2）土。鉄分を含む。
2　黄橙色（10YR7／8）土。ブロック状の砂粒を多量含む。
3　にぶい黄橙色（10YR7／2）土。鉄分を多く含む。
4　黄橙色（10YR7／8）シルト質土。砂粒を多量含む。基本的に2層と同質。
5　褐灰色（10YR4／1）シルト質土。砂粒（多量）、焼土粒、炭化物（微量）混入。粘性強く、カマド袖部の残骸の可能性。
6　明黄褐色（2.5YR6／8）シルト質土。砂粒、褐灰色（5YR6／1）粘土（多量）、焼土微小ブロック（少量）混入。粘性強い。カマド天井崩落土層。
7　極暗赤褐色（2.5YR2／2）シルト質土。砂粒、焼土粒、炭化物（多量）混入。しまり悪い。カマド天井崩落土層。
8　暗赤灰色（2.5YR3／1）粘土質土。砂粒（多量）、焼土微小ブロック（中量）混入。カマド天井崩落土層。
9　暗赤灰色（2.5YR3／1）粘土質土。焼土微小ブロック（多量）、炭化物（少量）混入。カマド天井崩落土層。
10　にぶい黄色（2.5Y6／3）土。焼土粒、炭化物（中量）混入。ややしまり悪い。カマド燃焼部火床。
11　黒褐色（2.5Y3／2）土。焼土微小ブロック、焼土粒、炭化物（超多量）混入。カマド燃焼部火床。
12　黒褐色（2.5Y3／2）土。基本的に11層と同質だが、カマド袖部分の褐灰色（5YR6／1）粘土が多量流入している。

第11図　3号住居跡及び遺物出土状況

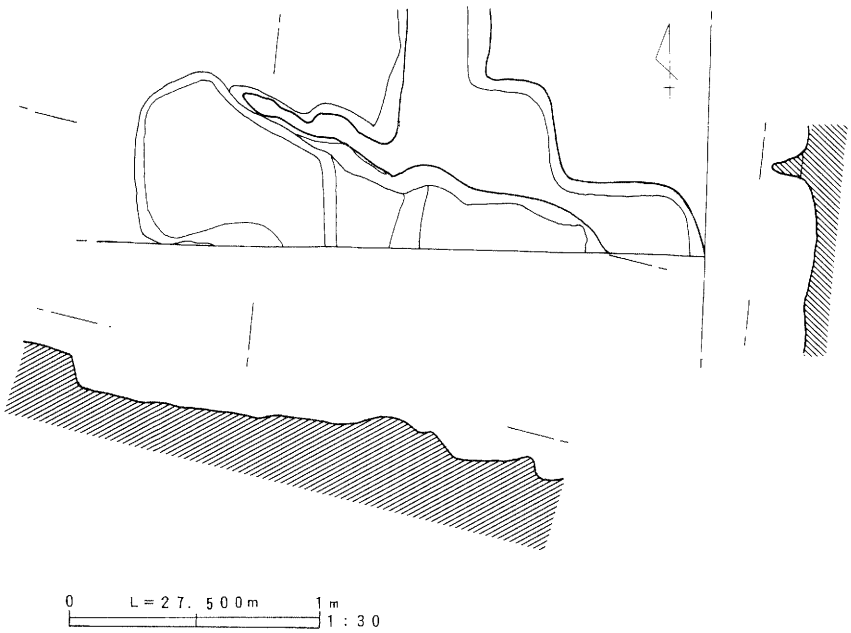
つ。括れ部から床面方は燃え滓が分布し、奥部は火床を成している。火床奥は段をもち、煙道へ繋がる。煙道は、奥に向け手徐々に降下し奥壁に達する。全体長は、1.90mを計る。

遺物は、カマド内及びカマド左脇床面上を中心に出土している。

3号住居跡出土遺物（第13図）

1は緑釉の杯と思われる。口縁付近のみが残存し、推定口径12.0cmを計る。胎土は細粒であり、焼成は良く、暗オリーブ（7.5Y4／3）色を呈する。内外面共細かい貫入がみられる。

2は灰釉高台椀である。下位1／3が残存し、推定底径8.0cmを計る。胎土は細粒であり、白色、黒色、赤色それぞれの細粒子を含む。焼成は良く、灰白（N8／　）色を呈する。体部は、全面にロクロ整形が施される。底面は糸切

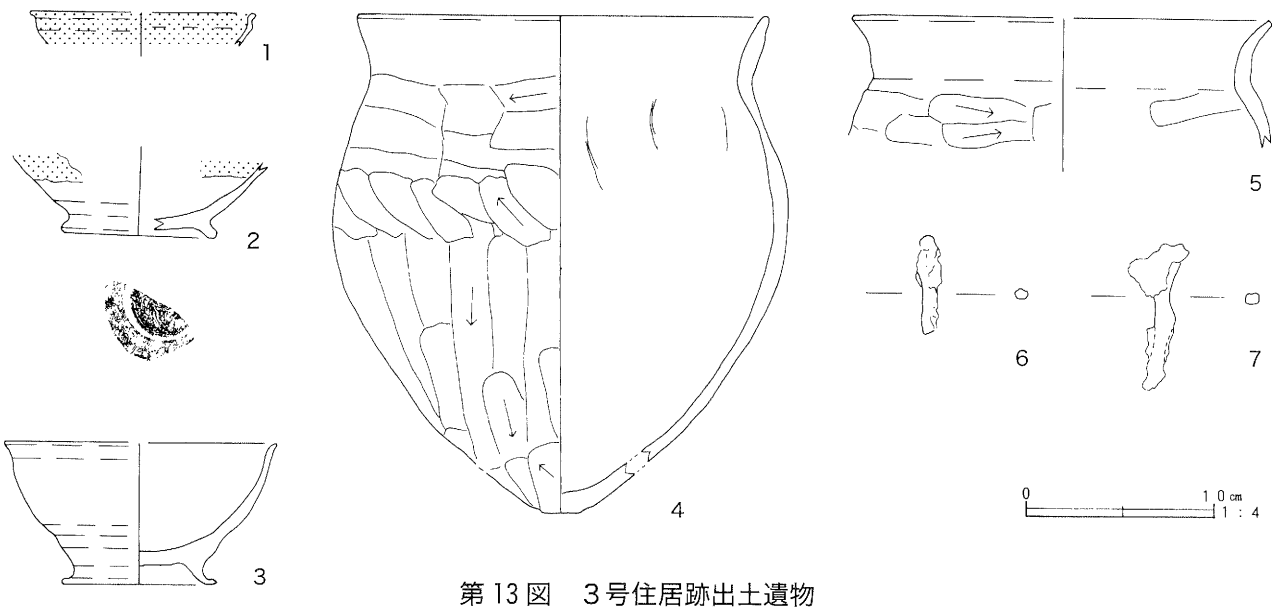


第12図　3号住居跡カマド

後、付け高台の周辺部回転ナデを加える。内外面共口縁部から中位にかけて施釉されているようである。内面の一部に炭化物が付着している。

3は土師器内黒の高台椀である。全体の1／3が残存し、推定口径14.6cm、高さ7.2cm、推定底径8.2cmを計る。胎土は細粒であるが、赤色、黒色、白色、及び片岩それぞれの粒子を多く含む。内面は、横方向を主体とした丁寧なミガキと共に黒色処理されている。外面は、橙（5YR7／8）色を呈し、表面は剥離しているものの、付け高台の後、底部全面にナデを加えている。また口縁部は横ナデを施している。

4は土師器甕である。全体の2／3が残存し、口径21.4cm、推定高25.6cm、底径2.0cmを計る。胎土には、黒色、白色、片岩、及び赤色それぞれの粒子を多く含み、鈍い橙（7YR7／4）色を呈する。口縁部は横のナデ、口唇部は横ナデを施している。胴部外面は上位から、横・斜め・縦・斜めの各方向で全面ケズリが施されており、全体の1／2に煤が付着している。胴部内面は、全面に横のナデが加えられており、下半部には炭化物、上半部には煤が付着している。



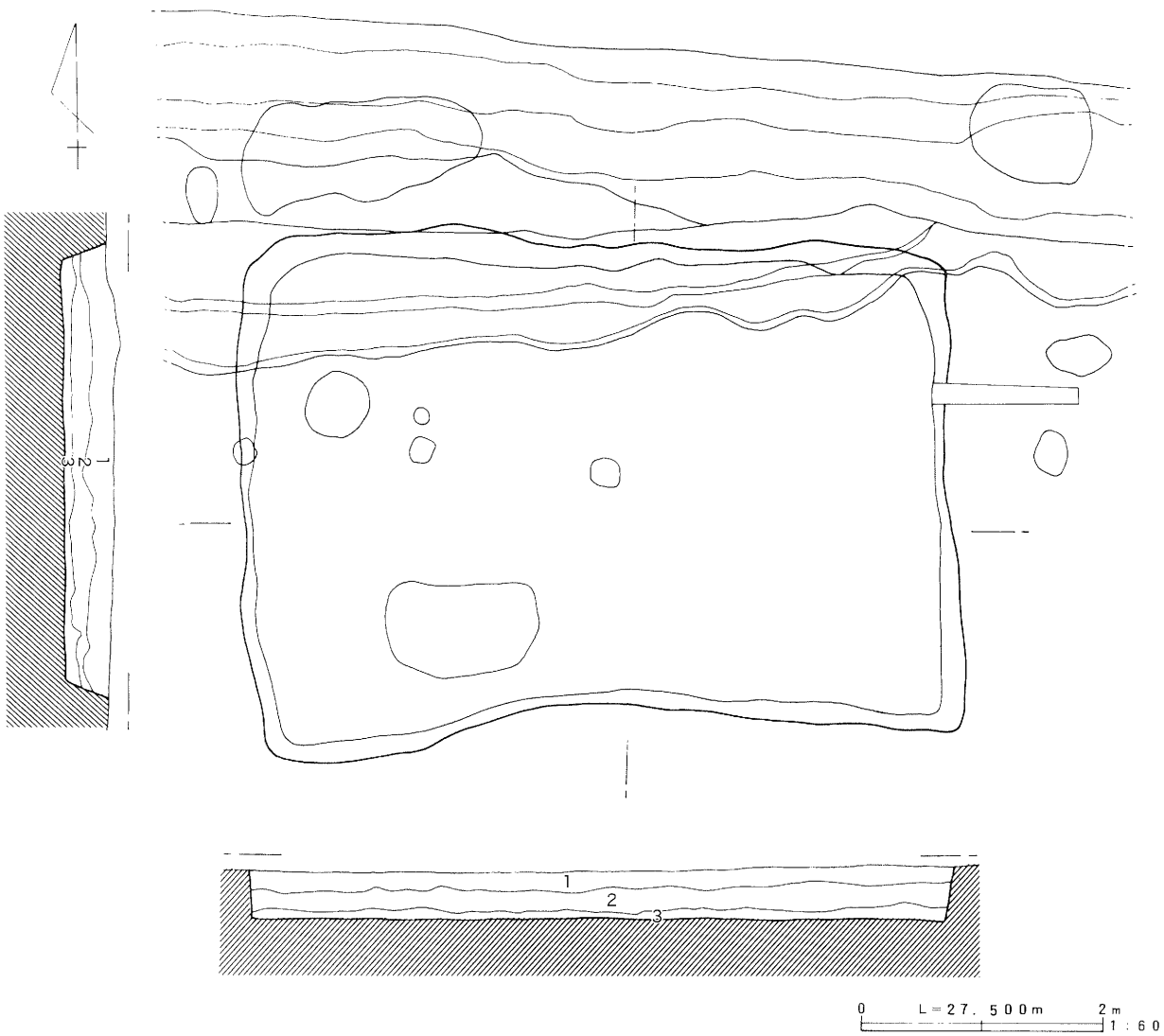
第13図　3号住居跡出土遺物

二次加熱を受けている。

5は土師器甕である。上位のみ1／4が残存し、推定口径22.2cmを計る。胎土には、白色、黒色、片岩、それぞれの粒子を多く含み、橙（5YR6／8）色を呈する。口縁部は横ナデ、胴部外面は横のケズリ、内面は木口状工具全による横のナデが施されている。二次加熱を受けている。

6は鉄製の角釘である。残存長5.1cmを計る。

7は鉄製の角釘である。残存長7.8cmを計る。



4号住居跡土層

1　灰黄色（2.5Y6／2）シルト質土。しまりよい。

2　灰黄褐色（10YR5／2）シルト質土。酸化鉄のブロックが多く混じる。
　1層より粘性強い。

3　にぶい黄褐色（10YR5／3）シルト質土。砂が多量に混入する。

第14図　4号住居跡

４号住居跡
（第 14 図）

Ｂ－４ポイントを中心に、Ａ－３・４、Ｂ－３・４グリッドにかけて位置し、北辺部分の上面は、３号及び４号溝によって削除されている。

壁は、南辺以外ほぼ直線を呈し、僅かに緩斜面をもって立ち上がる。北辺はやや蛇行するもののほぼ直線を成し5.90m、西辺はほぼ直線を成し4.50m、南辺は大きく蛇行し5.90m、東辺はほぼ直線を成し4.04mを計る。形態は、東西方向に長軸をもつ長方形を呈するといえる。

主軸方位は、Ｎ－90°－Ｅを示す。

覆土は、上層から灰黄色シルト（１層）、酸化鉄分を多く含む灰黄褐色シルト（２層）、砂を多く含む鈍い黄褐色シルト（３層）が、ほぼ水平に堆積している。

カマドは、検出されていない。東壁やや北寄りに僅かに焼土化した部分が認められ精査したが、遺構として成り立つものではなかった。

床面は、ほぼ水平である。

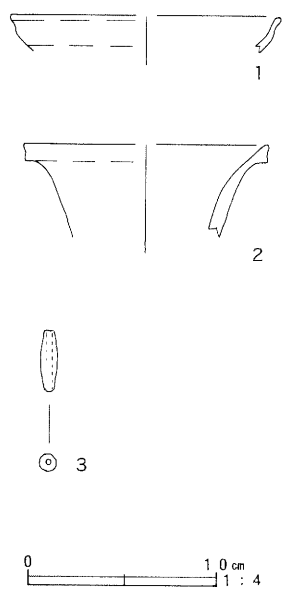
遺物は、覆土中から小片が僅かに出土したのみである。

４号住居跡出土遺物
（第 15 図）

１は須恵器の杯である。口縁付近のみが残存し、推定口径14.4cmを計る。胎土には黒色、白色、赤色、それぞれの粒子を含む。焼成はあまく、灰白（10ＹＲ８／２）色を呈する。ロクロ整形が施される。

２は灰釉の壺である。口縁付近のみが残存し、推定口径12.8cmを計る。胎土はやや粗く、黒色、白色、それぞれの粒子を含む。焼成は良く、灰白（2.5Ｙ７／１）色を呈する。ロクロ整形が施され、内外面に釉がかかる。

３は土錘である。長さ3.2cm、最大径0.9cm、孔径0.2～0.3cmを計る。



第 15 図　４号住居跡出土遺物

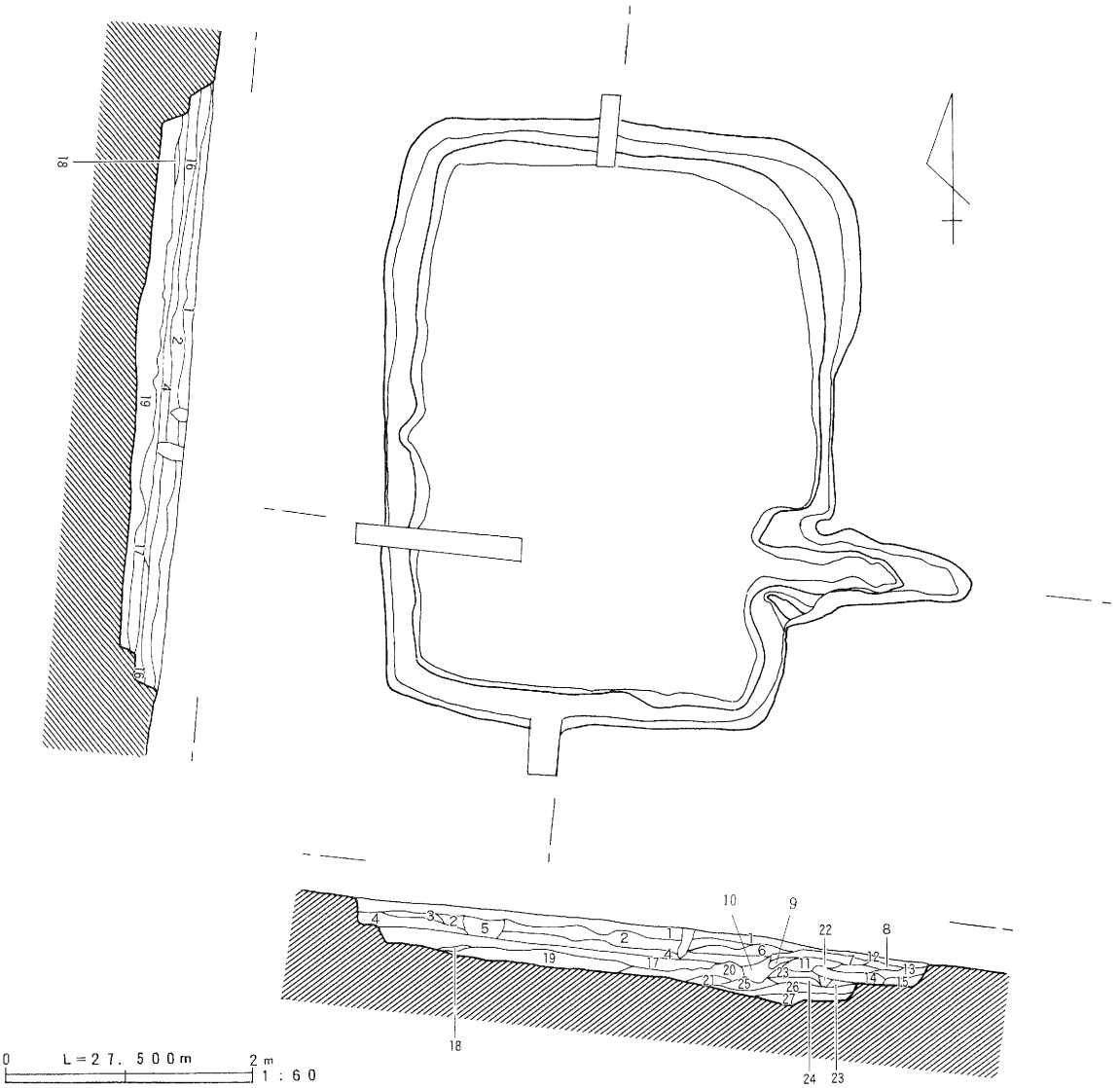
５号住居跡
（第 16 図）

大部分が、Ｃ－４、Ｄ－４グリッドにかけて位置し、西辺部分はＣ－５、Ｄ－５グリッドに及んでいる。

本住居跡は、新旧２時期に重なり、旧住居跡が半ばまで埋没した後、旧住居跡を四方に拡張した形で新住居跡が構築されている。そのため、カマドの位置が新旧で一致しており、主軸方位もまたＮ－96°－Ｅで一致する。

旧住居跡に、やや砂の混ざる鈍い黄褐色シルト（19層）、炭化物の僅かに混ざる鈍い黄褐色シルト（17層）が覆土として堆積した後、旧住居跡の中段を床面として新住居跡を拡張構築している。新住居跡には、黒褐色シルト（４層）、鈍い黄褐色シルト（２層）、鉄分を多く含む鈍い黄褐色シルト（１層）が堆積している。

旧住居跡　　壁は、東辺以外ほぼ直線を呈し、僅かに緩斜をもって立ち上がる。北辺はほぼ直線を成し、北東隅に丸みをもち3.20m、西辺はほぼ直線を成し4.25m、南



5号住居跡土層

1　にぶい黄褐色（10YR5／3）シルト質土。鉄分を多く含む。
2　にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質土。1層よりやや砂っぽい。鉄分が混じる。
3　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質土。やや粘性強い。
4　黒褐色（10YR3／2）シルト質土。上層の土に比べ、やや砂っぽい。炭化物が若干混じる。
5　暗灰黄色（2.5Y4／2）シルト質土。ややしまりにかける。
6　にぶい黄色（2.5Y6／4）シルト質土。比較的しまっている。
7　褐色（10YR4／4）粘土に近いシルト質土。焼土が所々に混じる。
8　暗灰黄色（2.5Y5／2）シルト質土。砂が混じる。
9　灰黄褐色（10YR4／2）粘土に近いシルト質土。
10　黒褐色（10YR3／1）粘土質土。焼土・灰が点々と混入する。
11　焼土層。
12　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質土。灰が多く混じる。
13　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質土。12層に比べ、やや粘性強い。
14　灰黄褐色（10YR5／2）シルト質土。灰が大半を占める。
15　暗灰黄色（2.5Y5／2）シルト質土。灰が混じる。
16　にぶい黄褐色（10YR5／3）粘土に近いシルト質土。
17　にぶい黄褐色（10YR5／3）シルト質土。炭化物が微量混じる。
18　にぶい黄褐色（10YR5／3）土。炭化物が集中。焼土も多く見られる。
19　にぶい黄褐色（10YR5／3）シルト質土。やや砂っぽい。砂が混じる。
20　にぶい黄褐色（10YR4／3）粘土に近いシルト質土。炭化物が多量に混じり、その中に焼土も混じる。
21　暗褐色（10YR3／3）粘土に近いシルト質土。20層より粘性強い。炭化物が多量に混じる。灰も微量混じる。
22　焼土ブロック。
23　灰黄褐色（10YR5／2）シルト質土。炭・焼土が多量に混じる。
24　にぶい黄色（2.5Y6／3）砂質土。酸化鉄が多く混じる。焼土・炭化物が微量混じる。
25　にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質土。灰が微量混じる。
26　灰黄褐色（10YR4／2）砂に近いシルト質土。焼土・炭化物が微量混じる。
27　灰黄褐色（10YR5／2）砂質土。灰・砂が混じり合っている。

第16図　5号住居跡

辺もほぼ直線を成し2.90m、東辺はやや脹らみをもち4.40mを計る。形態は、東西方向に短軸をもつ長方形を呈するものであるが、東南隅からカマドまでの間が、一段内側に入る。

カマドは、東壁南寄りに設置されている。両袖が竪穴内に位置する。燃焼部は幅20cmと狭い。奥に向けて傾斜し、奥行きは70cmを計る。奥壁は45°の傾斜をもって立ち上がる。煙道部は、幅12cm、長さ40cmを計り、緩やかな傾斜で、底面は直線を成す。奥壁は70°の傾斜をもって立ち上がる。

床面は、ほぼ水平であるが、何らかの施設は確認されていない。

遺物は、覆土中から小片が僅かに出土したのみである。

新住居跡

壁は、東辺以外ほぼ直線を呈し、僅かに緩斜面をもって立ち上がる。北辺はほぼ直線を成し、北東隅に丸みをもち3.60m、西辺はほぼ直線を成し4.70m、南辺もほぼ直線を成し3.20m、東辺はやや脹らみをもち4.80mを計る。形態は、旧住居跡同様、東西方向に短軸をもつ長方形を呈するものであり、東南隅からカマドまでの間が、一段内側に入るものである。

カマドは、東壁南寄りに設置されている。両袖が竪穴内に位置する。燃焼部は幅42cmあり、手前が僅かに窪むもののほぼ水平で、奥行きは65cmを計る。奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。煙道部は、幅30cm、長さ90cmを計り、底面はほぼ水平である。奥壁は70°の傾斜をもって立ち上がる。

床面は、ほぼ水平であるが、何らかの施設は確認されていない。

遺物は、炭化物を含む黒褐色シルト（４層）中から出土している（第17図）。

５号住居跡出土遺物
（新住居跡・第 18 図）

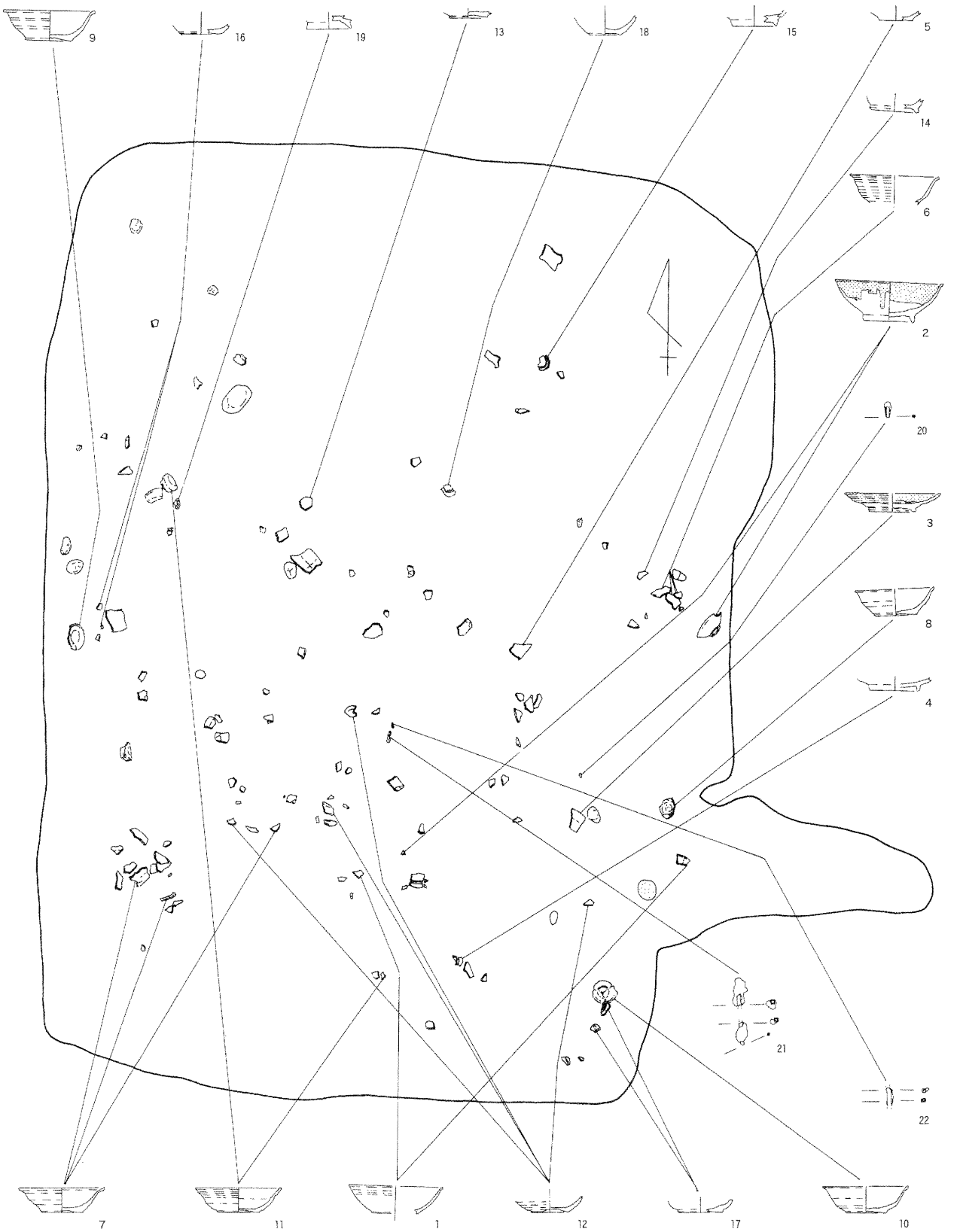
１は灰釉の椀である。上位のみ１／３が残存し、推定口径13.4cmを計る。胎土には黒色、白色それぞれの粒子を含む。焼成は良く、全体にオリーブ灰（10Ｙ６／２）色の釉がかかる。ロクロ整形が施される。

２は灰釉の椀である。完形であり、口径15.5cm、高さ5.2cm、底径7.0cmを計る。胎土はやや粗く、黒色、白色、それぞれの粒子を含む。焼成は良く、褐灰（10ＹＲ６／１）色を呈する。口縁部に釉がかかる。全面に回転の水拭が施される。全体にやや歪みをもつ。

３は灰釉の皿である。１／４が残存し、推定口径13.7cm、高さ2.5cm、底径6.4cmを計る。胎土はやや粗く、黒色の粒子を多く含む。焼成は良く、灰白（Ｎ７／　）色を呈する。口縁部に釉がかかる。全面に雑なナデが加えられる。糸切の後高台が付着されるが、雑である。高台周辺に窯滓が付着している。

４は灰釉の椀と思われる。底部付近のみが残存し、推定底径7.0cmを計る。胎土は非常に細かく、白色、黒色それぞれの粒子を含む。焼成は非常に良く、灰白（2.5ＹＲ７／１）色を呈する。口縁部に釉がかかっていたと思われる。丁寧なロクロ整形が施される。

５は須恵器の杯である。底部付近のみが残存し、推定底径4.6cmを計る。胎土はやや粗く、黒色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、灰（Ｎ６／　）色を呈する。体部は内外面共に雑なナデが施される。底面は、糸切の



第17図　5号住居跡遺物出土状況

0　L＝27.500m　1m
1：30

ままである。内面の一部に炭化物が付着している。

６は土師質の杯である。上位の３／４が残存し、口径12.2cmを計る。胎土はやや粗く、白色、片岩それぞれの粒子及び小礫を含む。焼成は悪く、灰白（10ＹＲ８／２）色を呈する。ロクロ整形が施される。口唇部内外面の一部及び底部付近外面に吸炭している。

７は土師質の杯である。全体の４／５が残存し、口径12.0cm、高さ3.4cm、底径5.9cmを計る。胎土はやや粗く、赤色、片岩、黒色、白色それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、鈍い橙（５ＹＲ７／４）色を呈する。ロクロ整形が施される。底面は、糸切のままである。二次加熱を受け、外面に煤が付着している。

８は土師質の杯である。全体の２／３が残存し、口径11.0cm、高さ3.6cm、底径5.80cmを計る。胎土はやや粗くマーブル状を呈し、黒色、赤色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、浅黄橙（10ＹＲ８／４）色を呈する。ロクロ整形が施される。底面は、糸切のままである。二次加熱を受けている。

９は土師質の杯である。口縁の一部が欠けるのみで、口径12.7cm、高さ4.1cm、底径6.3cmを計る。胎土はやや粗く、赤色、黒色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、浅黄橙（7.5ＹＲ８／６）色を呈する。ロクロ整形が施される。底面は、糸切のままである。二次加熱を受け、外面の一部に炭化物が付着し、内面の一部が吸炭している。

10は土師質の杯である。口縁の１／２が欠けるが、口径12.2cm、高さ3.6cm、底径5.6cmを計る。胎土はやや粗く、黒色、片岩、白色、赤色それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、鈍い黄橙（10ＹＲ７／３）色を呈する。ロクロ整形の後、ナデが施されている。底面は、糸切のままである。口縁部以外内外面共に吸炭している。

11は土師質の杯である。口縁の１／２が欠けるが、口径12.1cm、高さ3.3cm、底径5.8cmを計る。胎土はやや粗く、赤色、黒色、片岩、黒色、白色それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、鈍い黄橙（10ＹＲ７／３）色を呈する。ロクロ整形が施される。底面は、糸切のままである。底部から口縁の一部にかけて、内外面共に吸炭している。

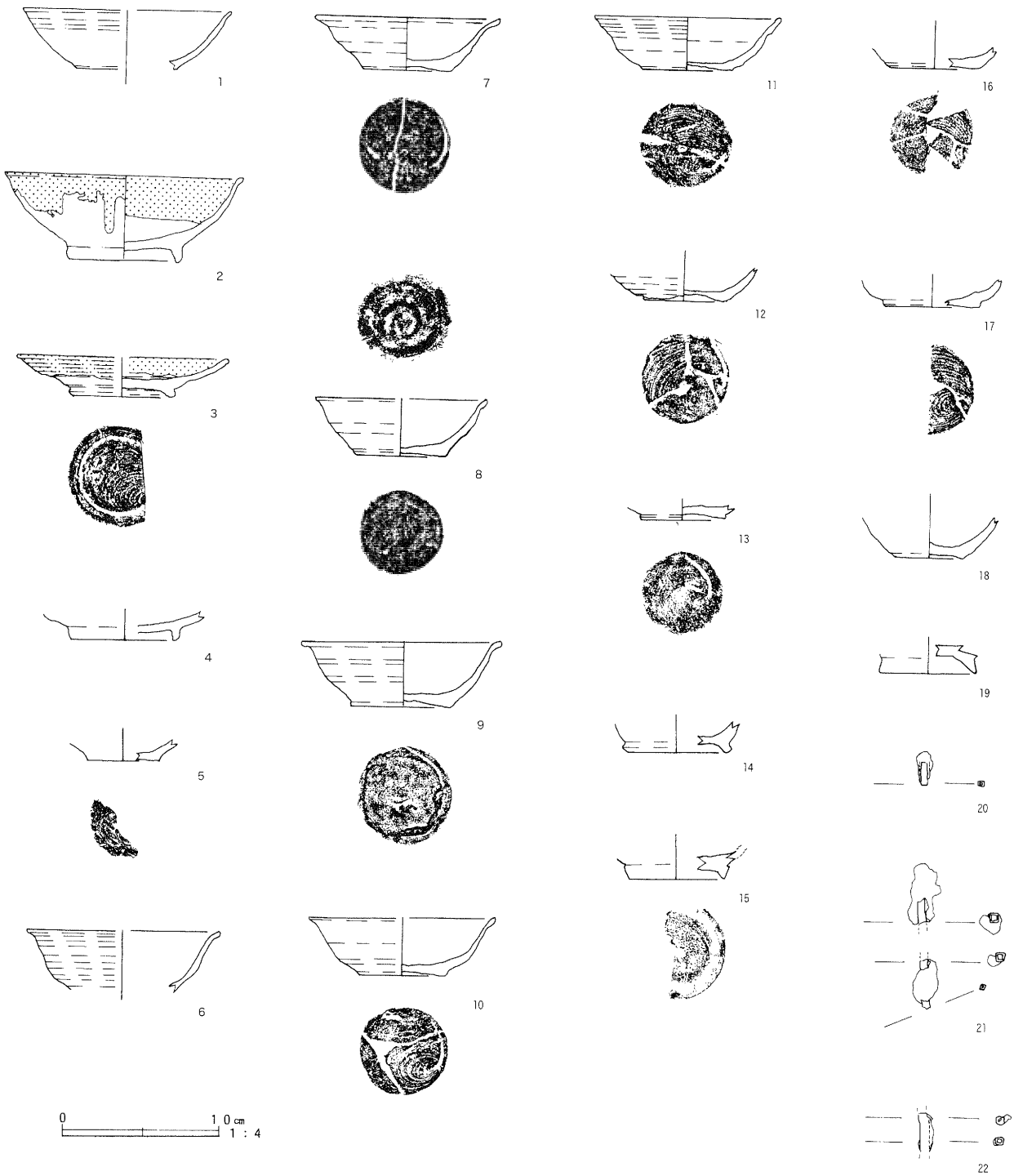
12は土師質の杯である。底部付近のみが残存し、底径5.3cmを計る。胎土はやや粗く、黒色、片岩、白色それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、赤橙（10Ｒ６／６）色を呈する。ロクロ整形が施される。底面は、糸切のままである。二次加熱を受け、内面に炭化物、外面に煤が付着している。

13は土師質の杯である。底部付近のみが残存し、底径5.4cmを計る。胎土はやや粗く、赤色、黒色、白色それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、浅黄橙（7.5ＹＲ８／４）色を呈する。底面は、糸切のままである。二次加熱を受け、内面に炭化物、外面に煤が付着している。

14は土師質の高台椀である。底部付近のみ１／３が残存し、推定底径6.4cmを計る。胎土はやや粗く、赤色、白色、黒色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は悪く気泡が入り、橙（2.5ＹＲ７／８）色を呈する。表面が剥離し、整形痕は不詳である。二次加熱を受け、内面は強く、外面も一部吸炭している。

15は土師質の高台椀である。底部付近のみ１／２が残存し、推定底径6.2cmを計る。胎土はやや粗く、黒色、赤色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は悪く気泡が入り、明赤褐（2.5ＹＲ５／６）色を呈する。ロクロ整形が施され、底面は糸切の後高台が付けられている。二次加熱を受け、内外面共一部吸炭している。

16は土師質の杯である。底部付近のみ１／２が残存し、推定底径5.7cmを計



第18図　５号住居跡出土遺物

る。胎土はやや粗く、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、鈍い橙（7.5ＹＲ７／４）色を呈する。表面が剥離し、整形痕は不詳であるが、底面は糸切のみ確認できる。

17は土師質の杯である。底部付近のみ１／２が残存し、推定底径6.2cmを計る。胎土はやや粗く、黒色、赤色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、鈍い橙（7.5ＹＲ７／４）色を呈する。表面が剥離し、整形痕は不詳であるが、底面は糸切のみ確認できる。二次加熱を受けている。

18は土師質の杯である。底部付近のみ１／２が残存し、推定底径4.5cmを計る。胎土はやや粗く、白色、黒色それぞれの粒子及び小礫を含む。焼成は悪く、灰黄褐（10ＹＲ４／２）色を呈する。表面が剥離し、整形痕は不詳である。全面に吸炭している。

19は土師質の高台椀と思われる。底部のみ１／４が残存し、推定底径6.4cmを計る。胎土は細かく、黒色、赤色、片岩、白色それぞれの粒子を含む。焼成は良く、橙（５ＹＲ７／６）色を呈する。表面が剥離し、整形痕は不詳である。二次加熱を受け、脆くなっている。

20は鉄製の角釘である。残存長2.2cmを計る。

21は鉄製の角釘である。２分されているが、出土状況から同一物とした。残存長はそれぞれ、4.0cmと3.2cmを計る。

22は鉄製の角釘である。残存長2.7cmを計る。

６号住居跡
（第19図）

Ｄ－７ポイント付近を中心に、Ｃ－６・７、Ｄ－６・７グリッドにかけて位置する。

壁はほぼ直線を呈し、僅かに傾斜をもつもののほぼ垂直に立ち上がる。北辺は3.60m、西辺は4.95m、南辺は4.25m、東辺は5.42mを計る。形態は、北西隅が直角とならず、南北に長軸をもつ長方形を基本としながら、台形を呈するものといえる。

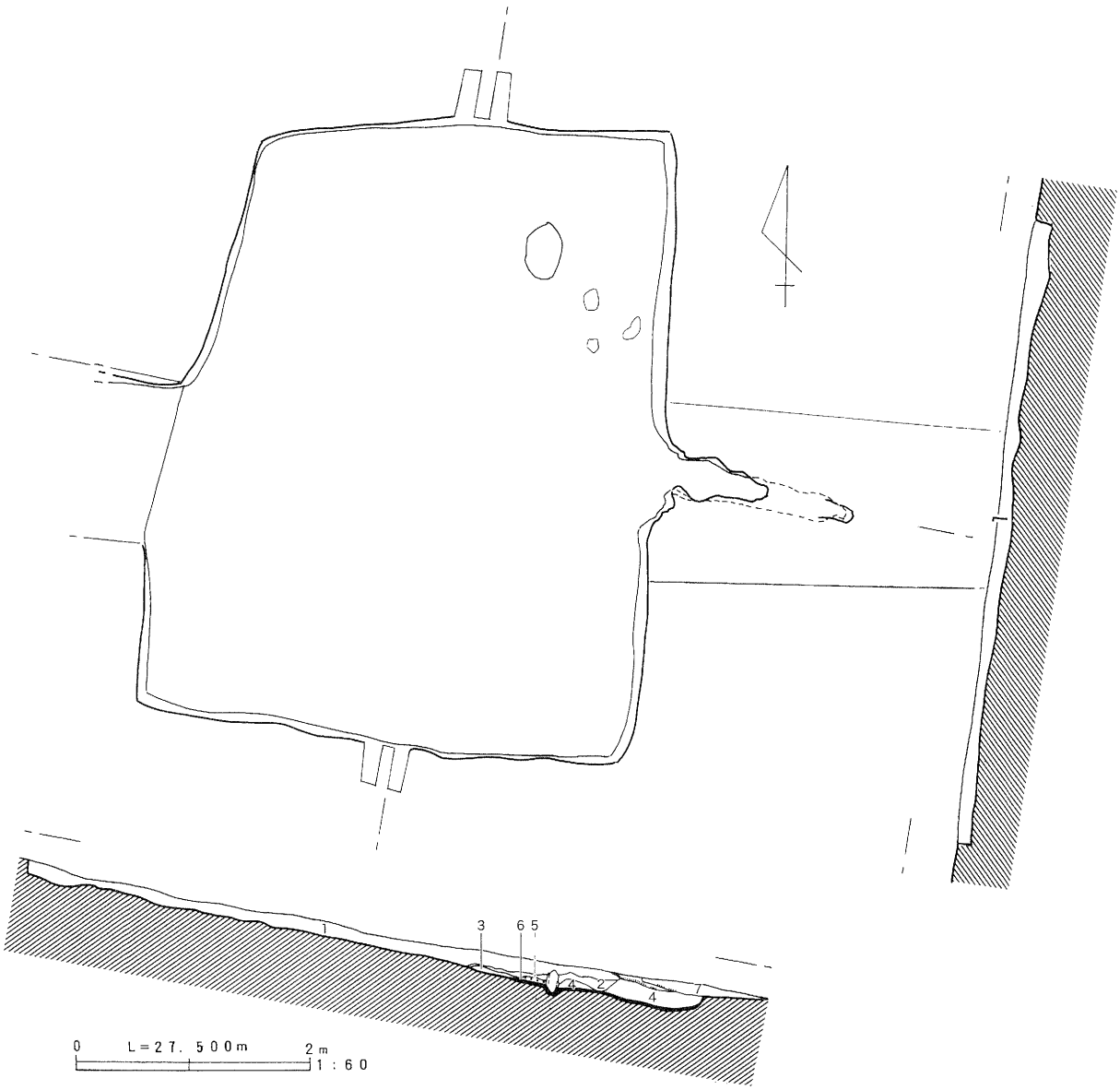
主軸方位は、Ｎ－101°－Ｅを示す。

覆土は、焼土が僅かに含まれる灰黄褐色シルト（１層）が確認されたのみである。

床面は、カマド周辺から中央部は水平であり安定するものの、周辺部では凹凸があり、安定しない。

カマドは、東壁中央僅かに南寄りに検出されている。袖は竪穴内に張り出さず、燃焼部は、前面幅80cm、奥面幅32cm、奥行き32cmで、壁外に八字状に作り出されている。壁は、垂直に造り出されている。燃焼部中央には石製の支脚が立てられ、支脚の前面は水平であり、焼土層（５層）及び灰層（６層）が堆積している。また支脚の後面は徐々に傾斜をもち、灰混在層（２・４層）が堆積している。煙道は、天井部の残存状況が良く、底面が水平で幅22cm、高さは15cmで断面が蒲鉾型を呈するものであった。煙出しは幅を狭め、煙道から弓状に立ち上がる。煙道から煙出しまで114cmを計る。（第20図）

遺物は、覆土中から須恵器高台椀片が僅かに出土したのみである。



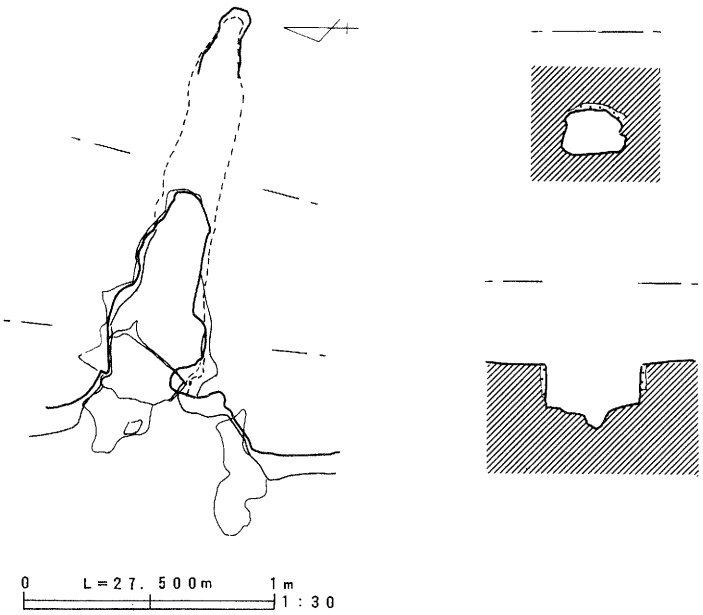
6号住居跡土層

1　灰黄褐色（10YR4／2）土。焼土も微量混じる。
2　にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質土。4層よりやや粘性強い。焼土がブロック状に入る。下面に灰が混じる。
3　黄褐色（2．5Y5／3）粘土に近いシルト質土。
4　暗灰黄色（2．5Y5／2）砂質土。灰が多量に混じる。
5　焼土層。
6　灰層。
7　焼土と灰の混在層。

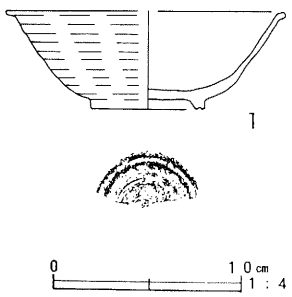
第19図　6号住居跡

6号住居跡出土遺物（第21図）

1は須恵器高台椀である。1／3が残存し、推定口径14.7cm、高さ5.0cm、推定底径6.0cmを計る。胎土には、白色粒子及び小礫を含む。焼成は悪く、灰（N4／　）色を呈する。ロクロ整形の後、ナデが施されている。底面は、糸切の後高台を付け、丁寧に横ナデを加えている。



第20図　6号住居跡カマド



第21図　6号住居跡
出土遺物

7号住居跡
(第22図)

B－8ポイント付近を中心に、A－7・8、B－7・8グリッドにかけて位置し、西半部分は、調査区域外に及んでいる。

このため、確認された壁は、東辺と北・南辺の一部のみであり、全体の規模は不明といわざるを得ない。東辺は3.52mを計り、壁は直線を成さないものの、ほぼ垂直に立ち上がる。また東辺は、北・南辺とは直交せず、中でも北東隅では円弧を描いて張り出した形を呈しており、形態も不詳である。一応、長方形を基本としたものと考えられる。

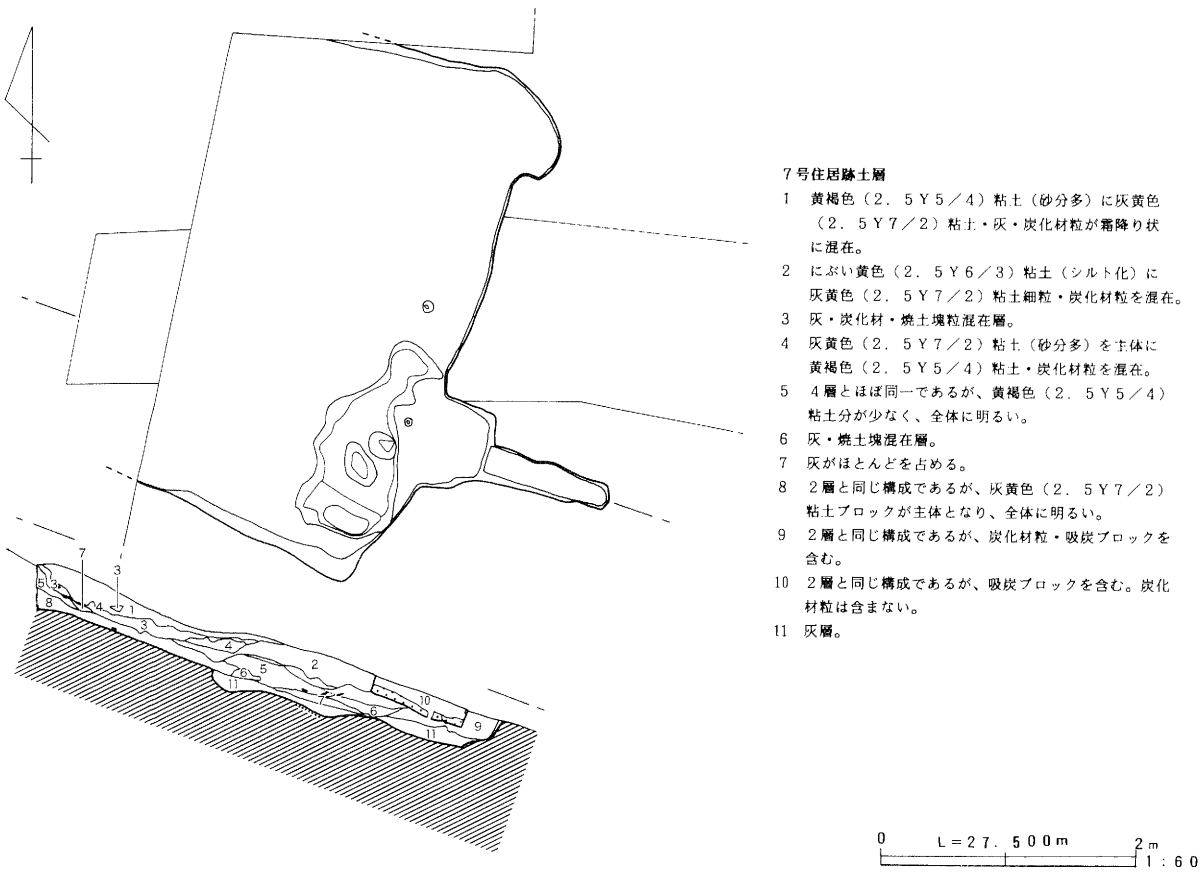
主軸方位は、N－109°－Eを示す。

覆土は最下層から、灰黄色粘土ブロックを主体に鈍い黄色粘土細粒及び炭化材粒が霜降り状に混在する層（8層）、灰黄色粘土（砂分多）を主体に少量の黄褐色粘土及び炭化材粒を混在する層（5層）、鈍い黄色粘土（シルト化）を主体に灰黄色粘土細粒及び炭化材粒を混在する層（2層）、黄褐色粘土（砂分多）を主体に灰黄色粘土・灰及び炭化材粒を霜降り状に混在する層（1層）を基本とする。最下層の8層を挟んで、灰・焼土をほぼ同量混在する層（6層）、灰を主体に焼土を混在する層（7層）が、特にカマド前で多くみられる。また2層と1層の間に、灰黄色粘土（砂分多）を主体に黄褐色粘土及び炭化材粒を混在する層（4層）、灰・炭化材粒・焼土塊を混在する層（3層）をレンズ状に挟む部分もある。総じて投入土の様相を呈している。

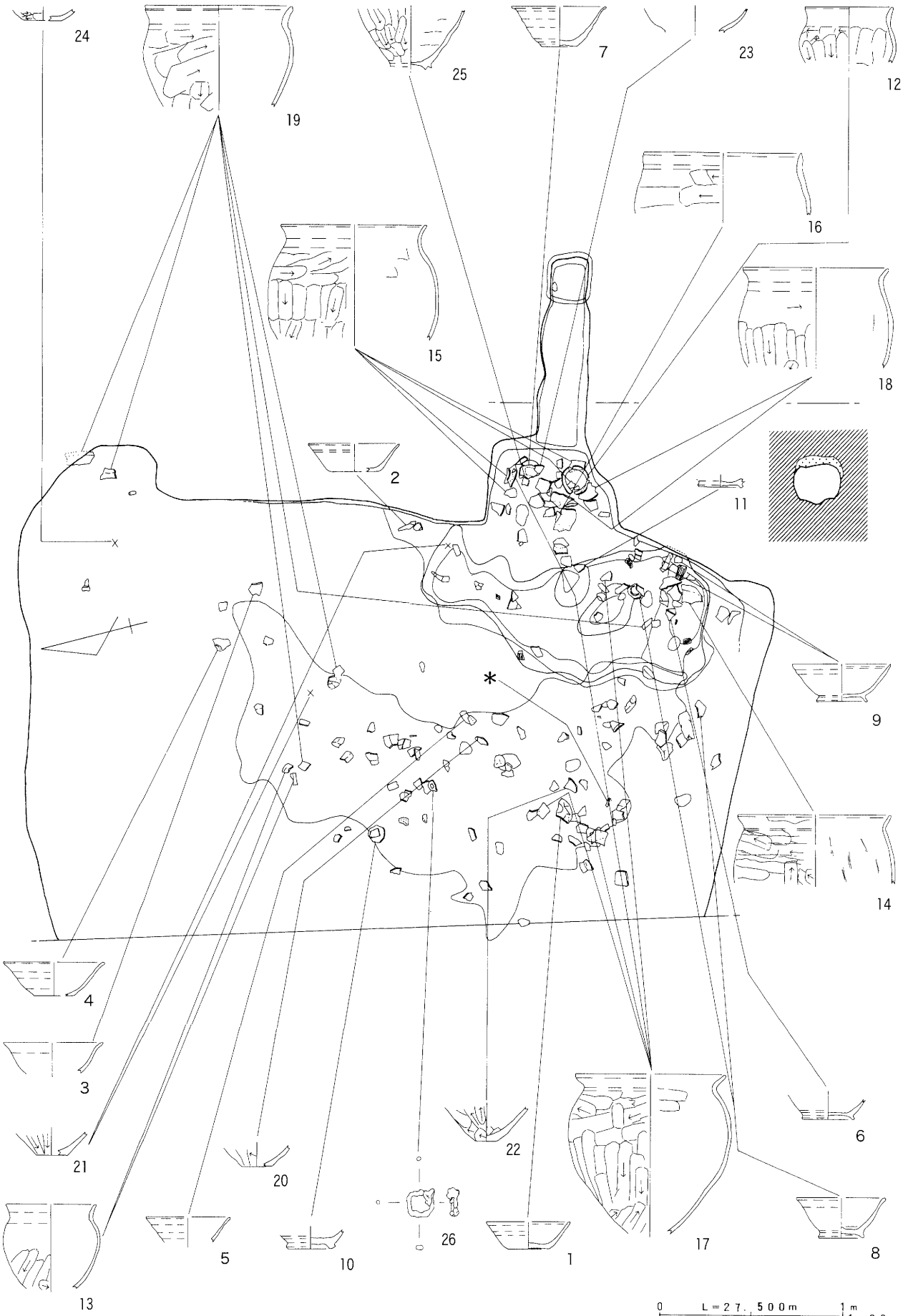
床面は、カマド全面から東南隅にかけて、不整形の2段の落ち込みがあり、最深部では床面から20cmの深さを計る。覆土は灰層（11層）の上面に6層もしくは7層が堆積している。他の床面は安定し、ほぼ水平を成す。

カマドは、東壁の南隅寄りに、良い残存状況で検出されている。袖は竪穴内に張り出していない。燃焼部は、前面幅75cm、奥面幅54cm、奥行き48cmで、一部が竪穴内に位置するものの大部分が竪穴外に造り出されている。壁は、両側面・奥面共に強固に焼土化し、北側は矩形、南側はやや波を打って前面から奥面に移行し、全体で台形状を呈している。底面は中央部が窪み、煙道部に向けて直線的に上昇する。煙道は、燃焼部の右壁（南壁）に沿って造られており、特に天井部の残存状況が良好であった。燃焼部との接点で幅27cmを計り、規模を減ずることなく煙出しまで連続する。高さは、燃焼部との接点で15cmを計る。底面は緩い弓状の窪みをもって、煙出しまで連続するが、天井部もまた緩い弓状の窪みをもって連続する。要するに断面形もまた、緩い弓状の窪みをもって規模を減ずることなく、煙出しまで連続するものである。断面形は各辺がやや丸味をもつ隅丸方形を呈する。煙道から煙出し奥壁まで108cmを計る。煙出しは、１辺22～23cmの隅丸方形を呈する。奥壁はほぼ垂直に立ち上がっている。また四壁は吸炭し、濃い小豆色に変色している。（第22・第23図）

遺物は、カマド内、前、脇の落ち込み内を中心に、灰・焼土をほぼ同量混在する層（６層）、灰を主体に焼土を混在する層（７層）、灰層（11層）中より出土している。他の土層中からはまったく出土しておらず、特異な出土状況を呈しているものである（第23図）。



第 22 図　７号住居跡



第23図　7号住居跡カマド及び遺物出土状況

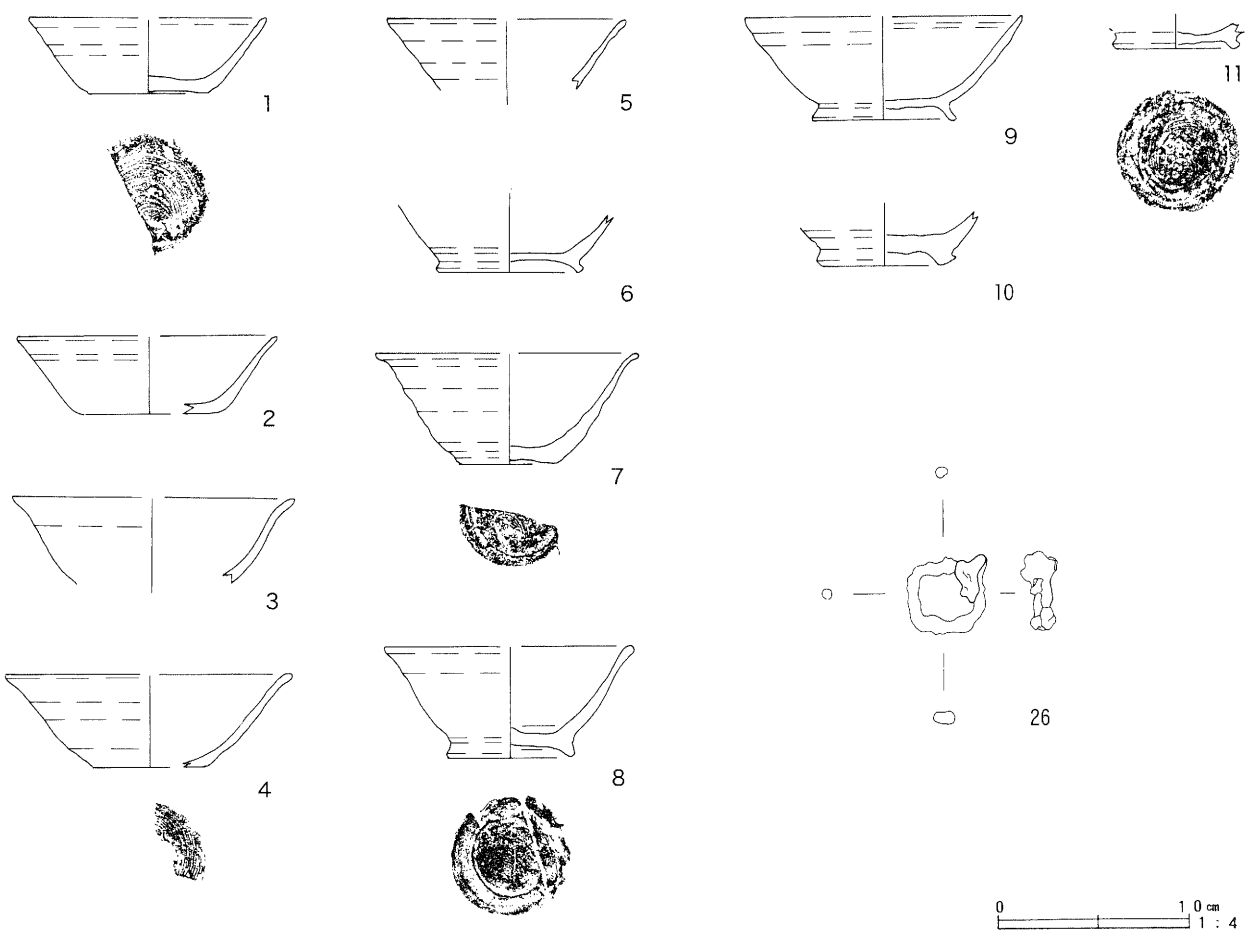
７号住居跡出土遺物
（第 24・第 25 図）

１は須恵器の杯である。１／２が残存し、推定口径12.6cm、高さ4.0cm、底径6.4を計る。胎土には黒色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、灰白（Ｎ７／　）色を呈する。外面の底部から口縁にかけての１／２は灰（Ｎ６／　）色を呈する。ロクロ整形が施される。口縁部は横ナデが加えられ、内面に段をもつ。底面は、糸切のままである。

２は土師質の杯である。１／４が残存し、推定口径13.5cm、高さ4.0cm、底径7.3cmを計る。胎土はやや粗く、片岩、白色、黒色、赤色それぞれの粒子及び礫を含む。焼成は悪く気泡が入り、明黄褐（10ＹＲ６／４）色を呈する。口縁部に釉がかかる。全面にナデが施される。全体にやや歪みをもつ。全面に吸炭している。

３は土師質の椀である。上位のみ１／４が残存し、推定口径12.2cmを計る。胎土はやや粗く、礫及び黒色、赤色、片岩、白色それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、明赤褐（５ＹＲ５／６）色を呈する。表面が剥離し、整形痕は不詳である。二次加熱を受け、全面に吸炭している。

４は土師質の椀である。１／４が残存し、推定口径15.6cm、高さ4.8cm、底径6.0cmを計る。胎土はやや粗く、白色、片岩、赤色、片岩それぞれの粒子及び礫を含む。焼成は悪く、赤褐（7.5ＹＲ５／６）色を呈する。表面が剥離し、整形痕は不詳である。二次加熱を受け、内面の一部に吸炭している。



第 24 図　７号住居跡出土遺物　1

５は須恵質の椀である。上位のみ１／４が残存し、推定口径12.5cmを計る。胎土はやや粗く、白色、黒色、片岩それぞれの粒子及び礫を含む。焼成は悪く、鈍い褐（7.5ＹＲ５／４）色を呈する。表面が剥離し、整形痕は不詳である。内外面の一部に炭化物が付着している。

６は須恵器の高台椀である。底部付近のみ１／５が残存し、推定底径7.8cmを計る。胎土はやや粗く、黒色、片岩、白色それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、灰白（Ｎ７／　）色を呈する。ロクロ整形が施される。底面は、糸切の後高台を付着。体部の内外面に吸炭している。

７は須恵質の高台椀である。１／４が残存し、高台は剥落している。推定口径13.8cm、高さ6.1cm、推定底径5.9cmを計る。胎土はやや粗く、礫及び白色、黒色、赤色それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、鈍い褐（7.5ＹＲ５／４）色を呈する。ロクロ整形が施される。底面は、全面ナデ付けられる。高台接着部に刻み目をもつ。底部の内外面に吸炭している。

８は須恵質の高台椀である。１／３が残存し、推定口径13.2cm、高さ5.7cm、推定底径6.6cmを計る。胎土はやや粗く、片岩、白色、赤色、黒色それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、鈍い黄褐（10ＹＲ５／４）色を呈する。ロクロ整形が施され、体部にはナデが加わる。底面は、糸切の後高台を付着し、回転のナデが加わる。二次加熱を受けており、内外面に煤が付着している。

９は土師質の高台椀である。１／３が残存し、推定口径14.6cm、高さ5.4cm、底径7.6cmを計る。胎土はやや粗く、赤色、黒色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、鈍い橙（7.5ＹＲ７／４）色を呈する。表面が剥離し、整形痕は不詳である。

10は土師質の高台椀である。底部のみが残存し、底径6.4cmを計る。胎土はやや粗く、礫及び白色、片岩、黒色それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、黒褐（10ＹＲ３／１）色を呈する。ロクロ整形が施されている。底面は、糸切の後高台を付着している。内外面共に吸炭している。

11は土師質の高台椀である。底部のみが残存し、底径6.0cmを計る。胎土はやや粗く、礫及び白色、片岩、黒色それぞれの粒子を含む。焼成はやや悪く、鈍い黄橙（10ＹＲ６／４）色を呈する。底面は、糸切の後高台を付着している。内外面共に吸炭している。

12は土師器の甕である。上位のみが残存し、口径13.0cmを計る。胎土には、赤色、黒色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は普通であり、橙（５ＹＲ６／６）色を呈する。口縁部横ナデ。胴部外面上位に横のケズリ、後中位に縦のケズリ。内面上位に縦のナデ、後中位に横のナデ、一部炭化物付着。二次加熱を受ける。

13は土師器の甕である。上位のみ１／３が残存し、推定口径13.6cmを計る。胎土はやや粗く、赤色、黒色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は普通であり、橙（7.5ＹＲ６／６）色を呈する。口縁部横ナデ。胴部外面下位に斜のケズリ。内面横のナデ、底部付近炭化物付着。二次加熱を受ける。

14は土師器の甕である。上位のみ１／４が残存し、推定口径22.4cmを計る。胎土には、黒色、赤色、白色、片岩それぞれの粒子及び小礫を含む。焼成は普通であり、鈍い橙（7.5ＹＲ６／４）色を呈する。口縁部は横ナデ、外面に折り返し痕がある。胴部外面上位に横のケズリ、後中位から下位に縦のケズリ。一部吸炭及び煤付着。内面横のナデ、輪積み痕がある。

15は土師器の甕である。上位のみ１／４が残存し、推定口径21.4cmを計る。胎土はマーブル状を呈し、赤色、黒色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は普通であり、橙（５ＹＲ６／８）色を呈する。口縁部横ナデ。胴部外面上位に横のケズリ、中位から下位に縦のケズリ。内面横のナデ。内外面一部吸炭。二次加熱を受ける。

16は土師器の甕である。上位のみ１／４が残存し、推定口径22.4cmを計る。胎土には、黒色、赤色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は普通であり、鈍い橙（7.5ＹＲ７／４）色を呈する。口縁部横ナデ。胴部外面横のケズリ、後最上位に横のナデが加わる。内面横のナデ。内外面煤付着。二次加熱を受ける。

17は土師器の甕である。底部以外の１／４が残存し、推定口径21.6cmを計る。胎土には、赤色、黒色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は普通であり、鈍い橙（10ＹＲ７／４）色を呈する。口縁部横ナデ。胴部外面上位に横のケズリ、後中位に縦のケズリ、下位は斜のケズリ。内面上位に木口状工具による横のナデ、他は横のナデ、吸炭一部炭化物付着。二次加熱を受ける。

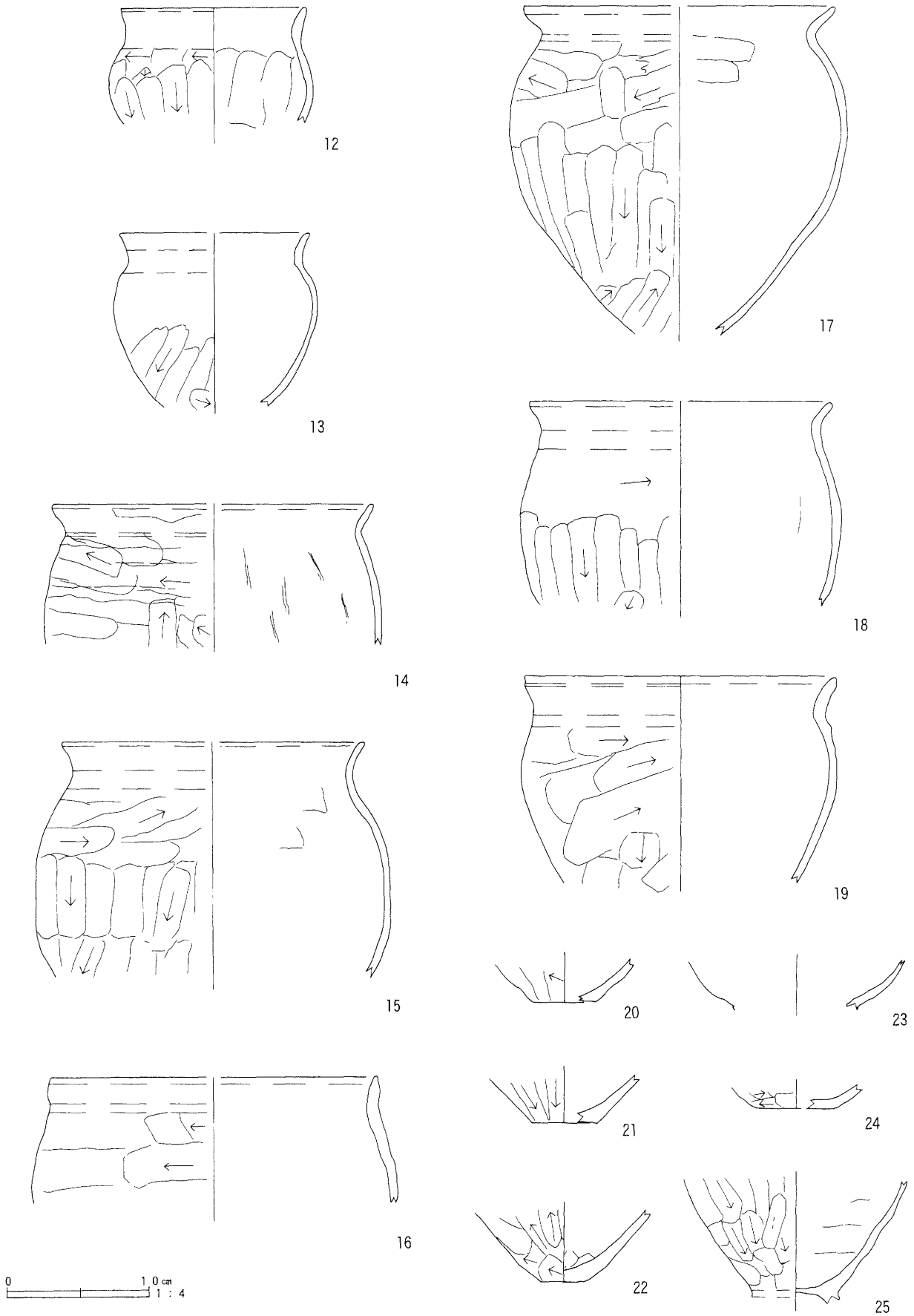
18は土師器の甕である。口縁付近の２／３みが残存し、口径21.3cmを計る。胎土はマーブル状を呈し、黒色、白色、赤色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は普通であり、橙（５ＹＲ６／８）色を呈する。口縁部２段の横ナデ。胴部外面上位に横のケズリ、後中位に縦のケズリ。内面横のナデ、一部炭化物付着。二次加熱を受ける。

19は土師器の甕である。底部を欠くが、口径22.2cmを計る。胎土には、赤色、黒色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は普通であり、橙（５ＹＲ６／６）色を呈する。口縁部横ナデ、内面一部吸炭。胴部外面上位に横から斜のケズリ、幅･長さ共に大きい。中位は長さの短い縦のケズリが加わる。一部吸炭。内面上位ヘラ状工具によるナデ、中位に横のナデ、一部吸炭。二次加熱を受ける。

20は土師器の甕である。底部付近のみ１／２が残存し、推定底径4.6cmを計る。胎土には、黒色、白色、赤色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は普通であり、浅黄橙（7.5ＹＲ８／６）色を呈する。胴部外面横から斜の面取り様のケズリ。胴部から底部内面は横後縦の水拭様ナデ、底部外面はケズリ。一部炭化物付着。二次加熱を受ける。

21は土師器の甕である。底部付近のみ１／３が残存し、推定底径4.6cmを計る。胎土には、赤色、黒色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は普通であり、橙（５ＹＲ６／８）色を呈する。胴部外面縦の面取り様のケズリ、一部吸炭。胴部から底部内面は横のナデ、底部外面は表面剥離のため整形痕不詳。二次加熱を受ける。

22は土師器の甕である。底部付近のみ１／３が残存し、推定底径3.0cmを計



第25図　7号住居跡出土遺物　2

る。胎土には、黒色、赤色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は普通であり、橙（7.5ＹＲ６／６）色を呈する。胴部外面斜のケズリ。内面横のナデ。底部内面木口状工具によるナデ。内外面一部吸炭。二次加熱を受ける。

23は土師器の甕である。底部付近のみ１／３が残存し、推定底径6.5cmを計る。胎土には、赤色、白色、黒色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は普通であり、橙（５ＹＲ６／６）色を呈する。胴部内外面共にナデ。外面一部炭化物付着。二次加熱を受ける。

24は土師器の甕である。底部付近のみ１／２が残存し、推定底径5.6cmを計る。胎土には、赤色、黒色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は普通であり、鈍い赤褐（５ＹＲ５／４）色を呈する。胴部外面横から斜のケズリ。内面横のナデ。内外面共一部炭化物付着。

25は土師器の台付甕である。胴部下位及び台上位の１／４が残存し、推定括れ径4.5cmを計る。胎土には、赤色、黒色、白色、片岩それぞれの粒子を含む。焼成は普通であり、橙（５ＹＲ７／６）色を呈する。胴部外面縦のケズリ、一部に斜のケズリ、斜のナデが加わる。台との接合部分横のナデ、一部吸炭。内面横のナデ。二次加熱を受ける。

26は方形環状の鉄製品である。外径2.9×3.1cm、内径1.7×2.2cmを計る。用途は不明である

その他として、馬歯が出土している（第23図中＊印）。

２　土坑

住居跡同様、調査区全体に分散して位置しており、総数22基が確認されている。

１号土坑
（第26図）

Ｂ－２グリッドに位置する。長円形を呈し、1.30（長軸）×0.76（短軸）×0.24（深さ）ｍの規模をもつ。長軸方位は、Ｎ－110°－Ｅを示す。床面はほぼ水平であり、覆土は上層より、鉄分を多く含む灰黄褐色シルト層（１層）、鈍い黄褐色シルト層（２層）である。遺物は、出土していない。

２号土坑
（第26図）

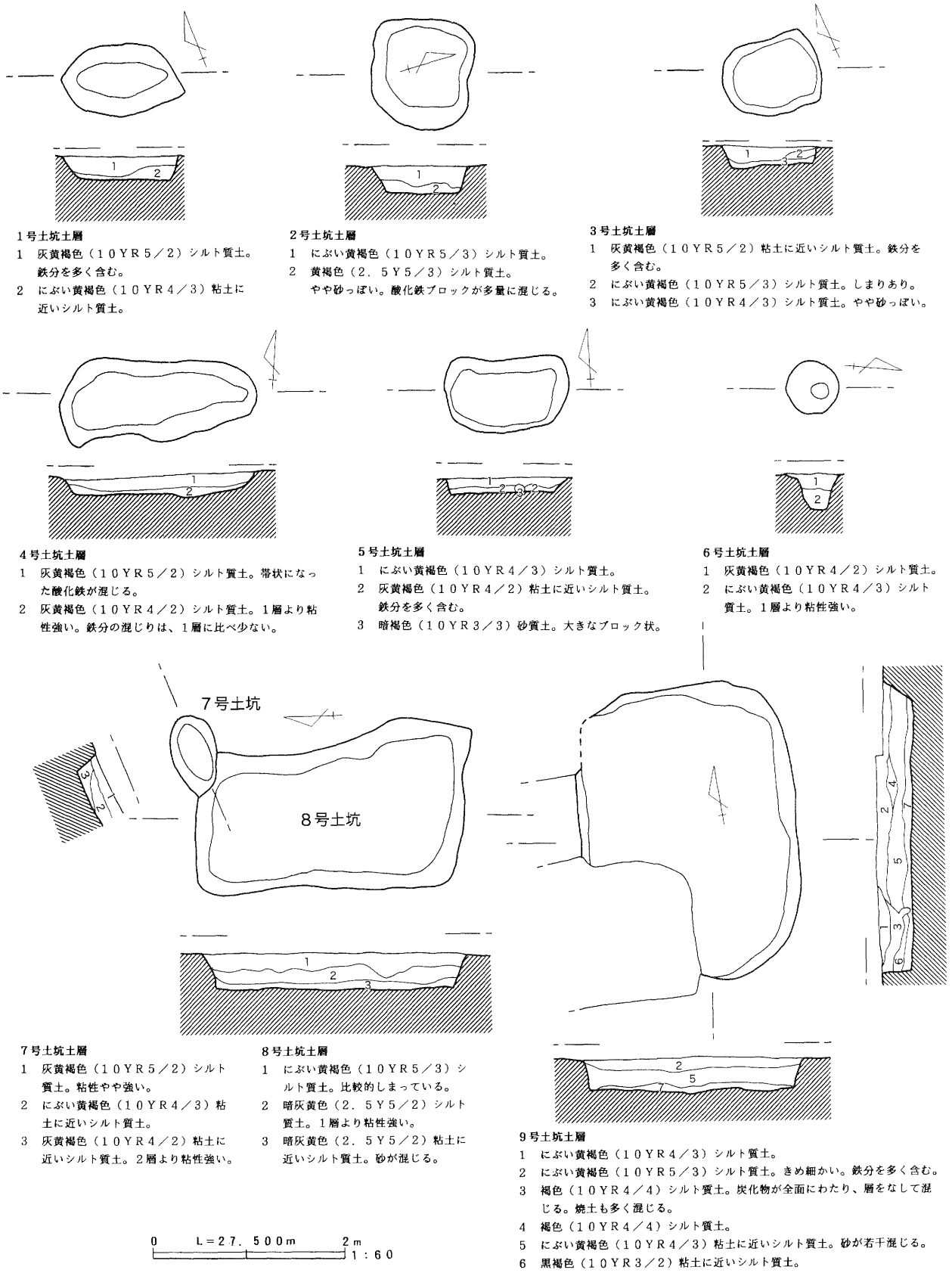
Ｂ－２からＣ－２グリッドにかけて位置する。隅円方形を呈し、1.15×1.04×0.30ｍの規模をもつ。長軸方位は、Ｎ－110°－Ｅを示す。床面はほぼ水平であり、覆土は上層より、鈍い黄褐色シルト層（１層）、酸化鉄ブロックを多量に含む黄褐色シルト層（２層）である。遺物は、出土していない。

３号土坑
（第26図）

Ａ－３グリッドに位置する。隅円方形を呈し、0.95×0.80×0.22ｍの規模をもつ。長軸方位は、Ｎ－97°－Ｅを示す。床面は西側が深くなり東に向けて、徐々に浅くなる。覆土は上層より、鉄分を多く含む灰黄褐色シルト層（１層）、鈍い黄褐色シルト層（２・３層）である。遺物は、出土していない。４号溝を切断している。

４号土坑

Ａ－４グリッドに位置する。長円形を呈し、2.05×0.85×0.14～0.23ｍの規



1号土坑土層
1 灰黄褐色（10YR5／2）シルト質土。鉄分を多く含む。
2 にぶい黄褐色（10YR4／3）粘土に近いシルト質土。

2号土坑土層
1 にぶい黄褐色（10YR5／3）シルト質土。
2 黄褐色（2.5Y5／3）シルト質土。やや砂っぽい。酸化鉄ブロックが多量に混じる。

3号土坑土層
1 灰黄褐色（10YR5／2）粘土に近いシルト質土。鉄分を多く含む。
2 にぶい黄褐色（10YR5／3）シルト質土。しまりあり。
3 にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質土。やや砂っぽい。

4号土坑土層
1 灰黄褐色（10YR5／2）シルト質土。帯状になった酸化鉄が混じる。
2 灰黄褐色（10YR4／2）シルト質土。1層より粘性強い。鉄分の混じりは、1層に比べ少ない。

5号土坑土層
1 にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質土。
2 灰黄褐色（10YR4／2）粘土に近いシルト質土。鉄分を多く含む。
3 暗褐色（10YR3／3）砂質土。大きなブロック状。

6号土坑土層
1 灰黄褐色（10YR4／2）シルト質土。
2 にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質土。1層より粘性強い。

7号土坑土層
1 灰黄褐色（10YR5／2）シルト質土。粘性やや強い。
2 にぶい黄褐色（10YR4／3）粘土に近いシルト質土。
3 灰黄褐色（10YR4／2）粘土に近いシルト質土。2層より粘性強い。

8号土坑土層
1 にぶい黄褐色（10YR5／3）シルト質土。比較的しまっている。
2 暗灰黄色（2.5Y5／2）シルト質土。1層より粘性強い。
3 暗灰黄色（2.5Y5／2）粘土に近いシルト質土。砂が混じる。

9号土坑土層
1 にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質土。
2 にぶい黄褐色（10YR5／3）シルト質土。きめ細かい。鉄分を多く含む。
3 褐色（10YR4／4）シルト質土。炭化物が全面にわたり、層をなして混じる。焼土も多く混じる。
4 褐色（10YR4／4）シルト質土。
5 にぶい黄褐色（10YR4／3）粘土に近いシルト質土。砂が若干混じる。
6 黒褐色（10YR3／2）粘土に近いシルト質土。
7 にぶい黄褐色（10YR5／3）粘土質土。1～7層の中で最も粘性強い。

第26図　土坑1（1～9号）

(第26図)

模をもつ。長軸方位は、N－87°－Eを示す。床面は東側が1段窪み、覆土は上層より、酸化鉄を含む灰黄褐色シルト層（1層）、酸化鉄を僅かに含む灰黄褐色シルト層（2層）である。遺物は出土していない。4号溝を切断している。

5号土坑
(第26図)

B－4グリッドに位置する。隅円長方形を呈し、1.28×0.76×0.15mの規模をもつ。長軸方位は、N－92°－Eを示す。床面はほぼ水平であり、覆土は上層より、鈍い黄褐色シルト層（1層）、鉄分を含む灰黄褐色シルト層（2層）であり、床上に暗褐色砂層（3層）をブロック状に堆積させている。遺物は、出土していない。4号住居跡を切断している。

6号土坑
(第26図)

A－4グリッドに位置する。円形を呈し、0.56×0.56×0.39mの規模をもつ。床面はほぼ水平で、覆土は上層より、灰黄褐色シルト層（1層）、鈍い黄褐色シルト層（2層）である。遺物は出土していない。4号住居跡を切断している。

7号土坑
(第26図)

B－5グリッドに位置する。長円形を呈し、0.90×0.50×0.25mの規模をもつ。長軸方位は、N－68°－Eを示す。床面はほぼ水平、覆土は上層より、灰黄褐色シルト層（1層）、鈍い黄褐色シルト層（2層）、やや粘性のある灰黄褐色シルト層（3層）である。遺物は出土していない。8号土坑に切断されている。

8号土坑
(第26図)

B－5グリッドに位置する。隅円長方形を呈し、2.80×1.45～1.65×0.40mの規模をもつ。長軸方位は、N－0°－Eを示す。床面はほぼ水平を成す。覆土は上層より、鈍い黄褐色シルト層（1層）、暗灰黄色シルト層（2層）、やや粘性のある暗灰黄色シルト層（3層）である。遺物は、台付き鉢と思われる土師器が出土している（第30図）。7号土坑を切断している。

9号土坑
(第26図)

B－5からB－6グリッドにかけて位置する。南西部を攪乱坑によって切断されているものの、隅円長方形を呈し、3.00×2.31×0.30～0.35mの規模が計測される。長軸方位は、N－8°－Eを示す。床面は多少凹凸がみられる。覆土は上層より、鉄分を多く含む鈍い黄褐色シルト層（2層）、砂が若干含まれる鈍い黄褐色シルト層（5層）、鈍い黄褐色粘土層（7層）を基本とし、南部に、鈍い黄褐色シルト層（1層）、炭化物・焼土を多く含む褐色シルト層（3層）、黒褐色シルト層（6層）が入り込んでいる。このうち3層が2・5層間にも堆積していることから、同一遺構内とした。遺物は3層中より、土師質及び須恵器の杯が出土している（第30図）。

10号土坑
(第27図)

A－6からB－6グリッドにかけて位置する。長円形土坑がL字形に組み合わさる。1.45×0.26～0.67×0.03～0.12mの規模をもつ。長軸方位は、N－48°－Eを示す。床面は北東部に窪みをもつ。覆土は上層より、鈍い黄色シルト層（1層）、灰黄褐色シルト層（2層）である。遺物は、出土していない。

11号土坑
(第27図)

B－6から7グリッドにかけて位置する。隅円長方形を呈し、2.00×1.05×0.34mの規模をもつ。長軸方位は、N－108°－Eを示す。床面はほぼ水平を成す。覆土は上層より、鈍い黄褐色シルト層（1層）、灰黄褐色シルト層（2層）、黄褐色シルト層（3層）である。遺物は、出土していない。

12号土坑
(第27図)

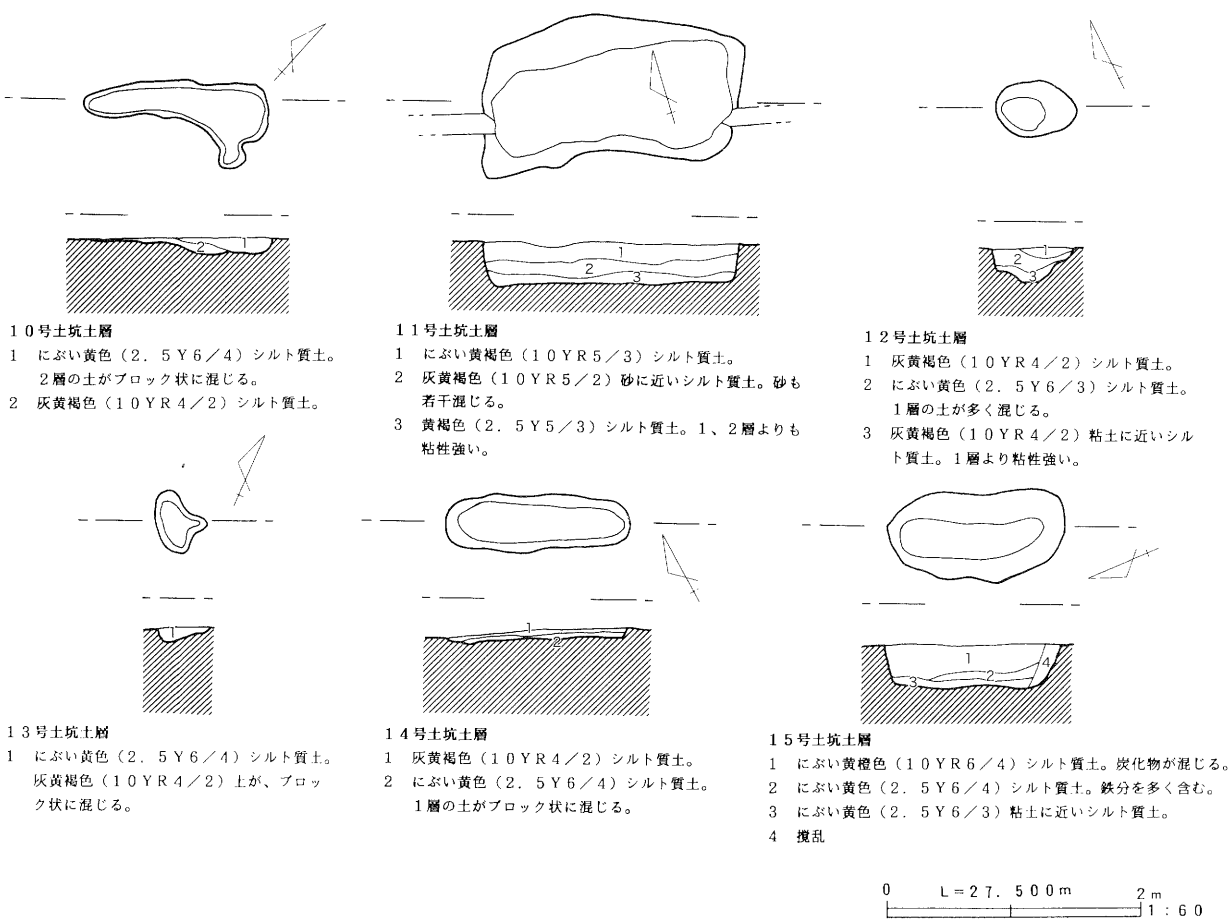
B－7グリッドに位置する。長円形を呈し、0.65×0.44×0.27mの規模をもつ。長軸方位は、N－116°－Eを示す。床面は2段を成し、それぞれがほぼ水平を成す。覆土は上層より、灰黄褐色シルト層（1層）、鈍い黄色シルト層（2層）、灰黄褐色シルト層（3層）である。遺物は、出土していない。

13号土坑
(第27図)

B－7グリッドに位置する。長円形(一部が張り出し凸形)を呈し、0.53×0.25～0.40×0.12mの規模をもつ。長軸方位は、N－113°－Eを示す。床面は西側が深く斜面を成す。覆土は、灰黄褐色土をブロック状に含む鈍い黄色シルト層である。遺物は、出土していない。

14号土坑
(第27図)

C－8グリッドに位置する。長円形を呈し、1.44×0.43×0.07mの規模をもつ。長軸方位は、N－118°－Eを示す。床面は凹凸があり、西側が徐々に浅く



第27図　土坑2（10～15号）

なる。覆土は上層より、灰黄褐色シルト層（１層）、鈍い黄色シルト層（２層）である。遺物は、土師質杯が出土している（第30図）。

15号土坑
（第27図）

Ｃ－８グリッドに位置する。長円形を呈し、1.20×0.54×0.26ｍの規模をもつ。長軸方位は、Ｎ－23°－Ｅを示す。床面はやや凹凸がある。覆土は上層より、鈍い灰黄橙色シルト層（１層）、鉄分を多量に含む鈍い黄色シルト層（２層）、鈍い黄色シルト層（３層）である。遺物は、出土していない。

16号土坑
（第28図）

Ｄ－１からＥ－１グリッドにかけて位置する。正方形を呈し、1.18×1.07×1.21ｍの規模をもつ。長軸方位は、Ｎ－23°－Ｅを示す。床面は水平を成す。覆土は上層より、鈍い黄褐色シルト層（１層）、鈍い黄橙色シルト層（２層）、酸化鉄を含む鈍い黄橙色シルト層（３層）、黄褐色粘土層（４層）、灰黄褐色粘土層（５層）、鈍い黄褐色粘土層（６層）、暗褐色粘土層（７層）、砂を含む暗褐色粘土層（８層）である。底面は酸化鉄を成す砂層である。遺物は、出土していない。

17号土坑
（第28図）

Ｄ－１グリッドに位置する。長円形を呈し、1.10×0.72×0.11ｍの規模をもつ。長軸方位は、Ｎ－18°－Ｗを示す。床面はほぼ水平を成す。覆土は上層より、鈍い黄褐色シルト層（１層）、暗灰黄色シルト層（２層）である。遺物は、出土していない。

18号土坑
（第28図）

Ｄ－１からＥ－１グリッドにかけて位置する。隅円長方形を呈し、0.96×0.70×0.12ｍの規模をもつ。長軸方位は、Ｎ－15°－Ｅを示す。床面はほぼ水平覆土は上層より、鈍い黄褐色シルト層（１層）、黄褐色シルト層（２層）である。遺物は、出土していない。19号土坑北壁を切断している。

19号土坑
（第28図）

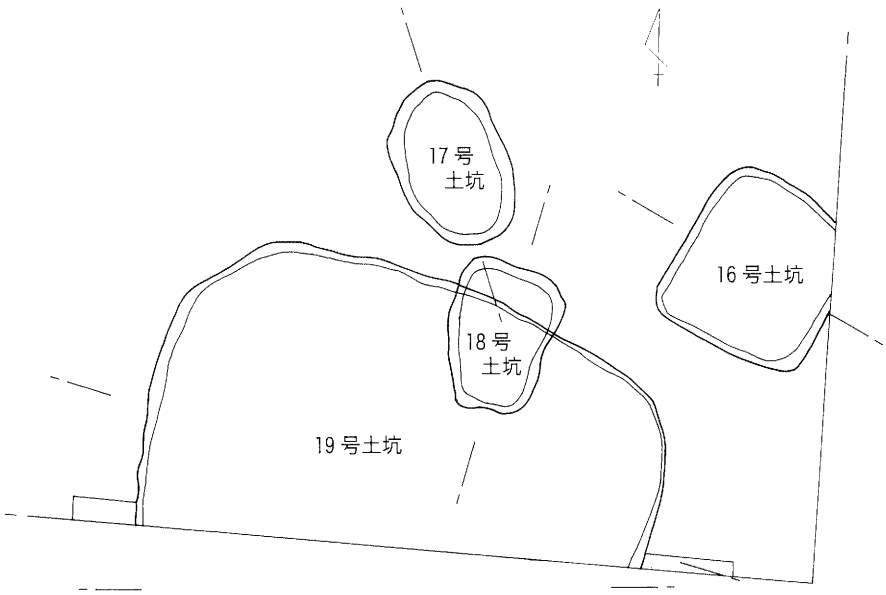
Ｄ－１・２からＥ－１・２グリッドにかけて位置する。南半部は調査区域外に及ぶ。隅円方形を呈すると思われる。北辺のみ計測され、3.47ｍを計る。北辺は、Ｎ－72°－Ｗを示す。床面はほぼ水平を成す。覆土は上層より、酸化鉄を含む鈍い黄色粘土層（１層）、灰黄褐色シルト層（２層）、酸化鉄を含む鈍い黄色粘土層（３層）、鈍い黄褐色シルト層（４層）、砂を含む鈍い黄褐色シルト層（４層）である。遺物は、出土していない。18号土坑によって北壁が切断されている。

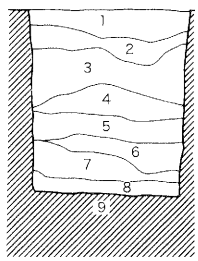
20号土坑
（第28図）

Ｄ－３グリッドに位置する。隅円長方形を呈し、2.00×1.47×0.15ｍの規模をもつ。長軸方位は、Ｎ－７°－Ｅを示す。床面はほぼ水平を成す。覆土は上層より、鈍い黄褐色シルト層（１層）、暗灰黄色シルト層（２層）である。遺物は、出土していない。

21号土坑
（第28図）

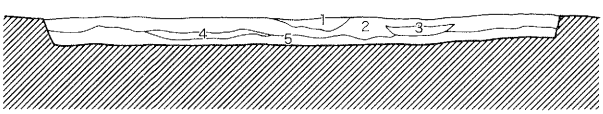
Ｄ－５グリッドに位置する。円形を呈し、1.04×1.02×0.25ｍの規模をもつ。床面はほぼ水平を成す。覆土は上層より、鈍い黄褐色シルト層（１層）、灰黄





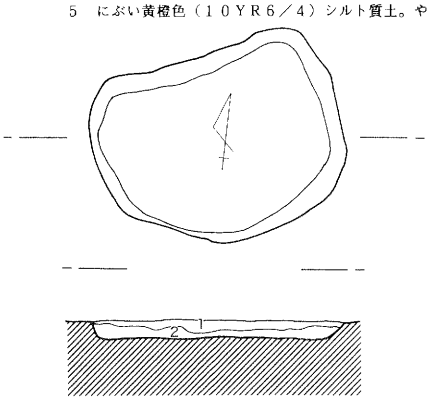
１６号土坑土層

1　にぶい黄褐色（１０ＹＲ５／４）シルト質土。砂が若干混じる。
2　にぶい黄橙色（１０ＹＲ６／４）粘土に近いシルト質土。１層に比して、砂の混じりが多い。
3　にぶい黄橙色（１０ＹＲ６／３）粘土に近いシルト質土。粘性強い。酸化鉄のブロックが若干混じる。
4　黄褐色（２．５Ｙ５／３）粘土質土。酸化鉄のブロックが混じる。砂も混じる。
5　灰黄褐色（１０ＹＲ５／２）粘土質土。酸化鉄のブロックが多量混じる。
6　にぶい黄褐色（１０ＹＲ４／３）粘土質土。粘性極めて強い。
7　暗褐色（１０ＹＲ３／３）粘土質土。粘性極めて強い。
8　暗褐色（１０ＹＲ３／３）粘土質土。７層に比して粘性弱い。底面の砂が混じる。
9　鉄分を多く含み、赤みがかった砂層。（底面）



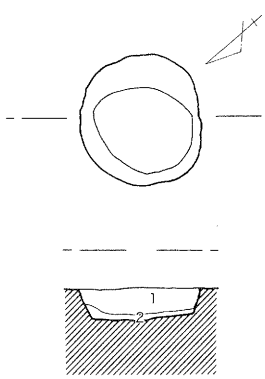
１９号土坑土層

1　にぶい黄色（２．５Ｙ６／３）粘土質土。酸化鉄のブロックが混じる。
2　灰黄褐色（１０ＹＲ５／２）シルト質土。
3　にぶい黄色（２．５Ｙ６／３）粘土質土。１層に比して、酸化鉄の混じりが多い。
4　にぶい黄褐色（１０ＹＲ５／４）シルト質土。やや砂っぽい。
5　にぶい黄橙色（１０ＹＲ６／４）シルト質土。やや粘性強い。砂が混じる。



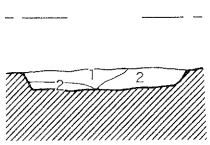
２０号土坑土層

1　にぶい黄褐色（１０ＹＲ５／３）砂に近いシルト質土。
2　暗灰黄色（２．５Ｙ５／２）砂質土。酸化鉄微量混じる。



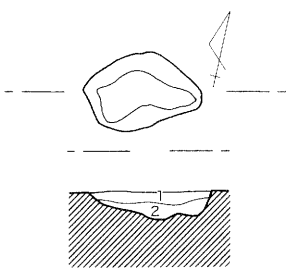
２１号土坑土層

1　にぶい黄褐色（１０ＹＲ５／４）シルト質土。２層の土が縞状に混じる。
2　灰黄褐色（１０ＹＲ４／２）粘土質土。



１７号土坑土層

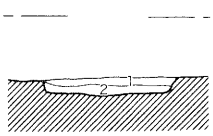
1　にぶい黄褐色（１０ＹＲ５／４）砂に近いシルト質土。
2　暗灰黄色（２．５Ｙ５／２）砂に近いシルト質土。砂も若干混じる。



２２号土坑土層

1　黄褐色（２．５Ｙ５／３）粘土に近いシルト質土。
2　灰黄色（２．５Ｙ６／２）粘土に近いシルト質土。１層より粘性強い。

0　L＝27．500m　2m
1：60



１８号土坑土層

1　にぶい黄褐色（１０ＹＲ５／４）シルト質土。
2　黄褐色（２．５Ｙ５／３）粘土に近いシルト質土。粘土のブロックが微量混じる。

第28図　土坑３（16～22号）

褐色粘土層（２層）である。遺物は、出土していない。

22号土坑
（第28図）

Ｄ－７グリッドに位置する。不整の隅円長方形を呈し、0.95×0.60×0.21ｍの規模をもつ。長軸方位は、Ｎ－78°－Ｅを示す。床面は凹凸があり、東へ傾斜する。覆土は上層より、黄褐色シルト層（１層）、灰黄色シルト層（２層）である。遺物は、出土していない。

土坑出土遺物
（第30図）

８号土坑出土－１。土師器台付き鉢と思われる。台のみ１／２の出土である。推定台裾径14.4cm、高さ4.4cmを計る。胎土はやや粗く、黒色、赤色、白色、片岩それぞれの粒子及び小礫を含む。焼成は普通であり、赤褐（2.5ＹＲ５／６）色を呈する。底部内外面共ナデ。台接合後回転のナデを加える。台部内外面共煤付着。二次加熱を受ける。

９号土坑出土－１。土師質杯である。１／２が残存し、推定口径12.0cm、高さ4.0cm、底径5.0cmを計る。胎土はやや粗く、小礫及び白色、片岩、黒色、赤色それぞれの粒子を含む。焼成は悪く、黒褐（10ＹＲ３／１）色を呈する。ロクロ整形後全体にナデが加えられる。内外面共吸炭し煤付着。内面一部炭化物付着。二次加熱を受ける。

９号土坑出土－２。須恵器杯である。上位のみ１／２が残存し、推定口径は14.0cmを計る。胎土はやや粗く、白色、黒色、赤色それぞれの粒子及び小礫を含む。焼成は良く、褐灰（10ＹＲ５／１）色を呈する。ロクロ整形が施されている。

14号土坑出土－１。土師質杯である。口縁の一部を欠くが、口径12.7cm、高さ3.5cm、底径5.5cmを計る。胎土はやや粗く、小礫及び、片岩、白色それぞれの粒子及び小礫を含み、マーブル状を呈する。焼成は悪く、橙（2.5ＹＲ７／６）色を呈する。ロクロ整形が施されている。底部は糸切のままである。

３　溝

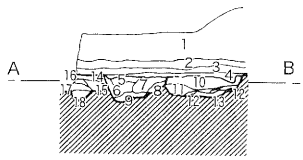
全ての溝が、調査区北端Ａライン上の、１から７グリッドにかけて位置しており、総数４条確認されている。全ての溝が同一の方向性を示している。Ａ－５グリッドから西では、南北に３条が並行しており、北側から１号溝・２号溝・３号溝とした。また、Ａ－５グリッドにおいて、３条を切断して構築されている溝を４号溝とした。

1号溝
（第29図）

大部分が調査区域外に及び、南壁が確認されるのみであるため、規模等は計測不能である。東端はＡ－３グリッド３ライン上から、西端はＡ－７グリッド調査区域外に及ぶ。流れの方位は、Ｎ－94°－Ｅを示す。覆土は、２号溝第10層と同一の、褐灰色シルト層である。遺物は、出土していない。

2号溝
（第29図）

東端はＡ－４グリッド４ライン上で４号溝に削除されている。西端はＡ－７グリッド調査区域外に及ぶ。流れの方位は、１号溝と同一のＮ－94°－Ｅを示す。溝幅は、狭広がみられ、0.52～1.10ｍを計測するが、大部分は１ｍ前後で

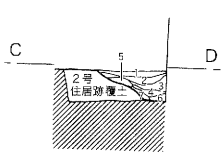


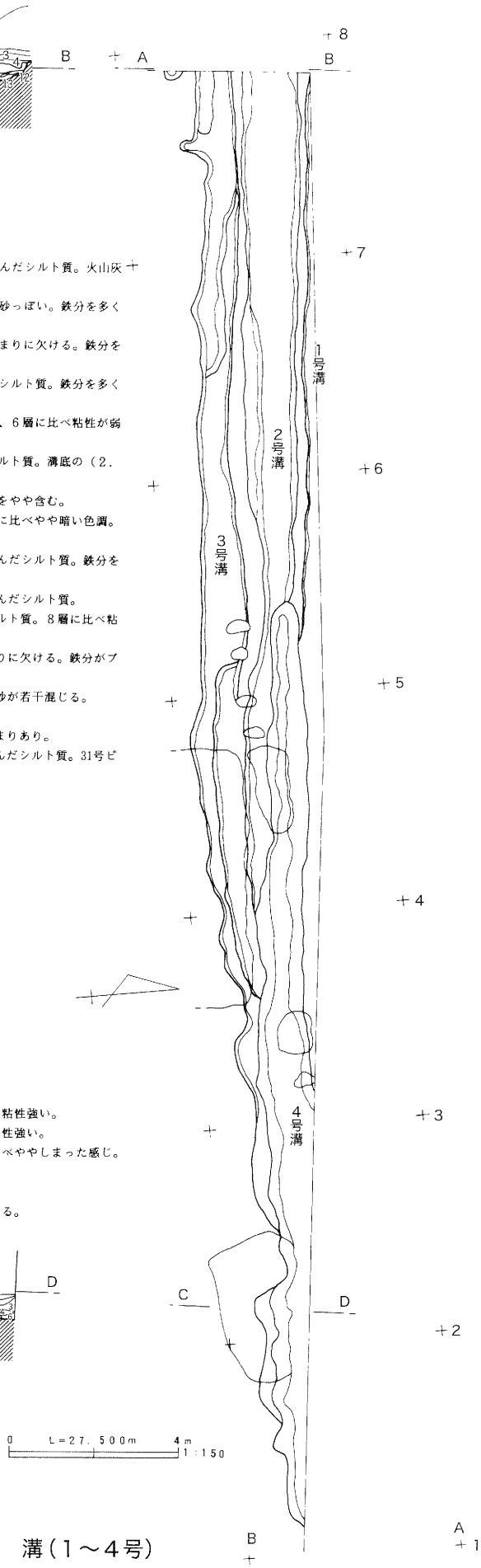
A－B土層

1　耕作土。しまりなし。
2　耕作土。しまりなし。
3　黄灰色（2．5Y5／1）旧水田土。粘性に富んだシルト質。火山灰混じる。
4　褐灰色（10YR5／1）土。シルト質。やや砂っぽい。鉄分を多く含む。2・3号溝共通の覆土。
5　灰黄褐色（10YR5／2）土。シルト質。しまりに欠ける。鉄分を多く含む。
6　灰黄褐色（10YR4／2）土。粘性に富んだシルト質。鉄分を多く含む。
7　灰黄褐色（10YR4／2）土。6層に近いが、6層に比べ粘性が弱い。
8　黒褐色（10YR3／2）土。粘性に富んだシルト質。溝底の（2．5Y6／4）土が、ブロック状に若干混じる。
9　灰黄褐色（10YR5／2）土。粘土質。鉄分をやや含む。
10　褐灰色（10YR5／1）土。シルト質。4層に比べやや暗い色調。4層よりもしまっている。
11　にぶい黄褐色（10YR4／3）土。粘性に富んだシルト質。鉄分を多く含む。
12　にぶい黄褐色（10YR5／4）土。粘性に富んだシルト質。
13　黒褐色（10YR3／2）土。粘性に富んだシルト質。8層に比べ粘性が弱い。
14　黄灰色（2．5Y5／1）土。シルト質。しまりに欠ける。鉄分がブロック状に点在。
15　にぶい黄色（2．5Y6／4）土。シルト質。砂が若干混じる。
16　にぶい黄褐色（10YR4／3）土。シルト質。
17　灰黄褐色（10YR4／2）土。シルト質。しまりあり。
18　にぶい黄褐色（10YR4／3）土。粘性に富んだシルト質。31号ピット覆土。

C－D土層

1　にぶい黄褐色（10YR5／3）シルト。
2　灰黄褐色（10YR4／2）シルト。
3　にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト。やや粘性強い。
4　黒褐色（10YR3／2）シルト。3層より粘性強い。
5　灰黄褐色（10YR4／2）シルト。2層に比べややしまった感じ。軽石が混じる。
6　にぶい黄褐色（10YR4／3）粘土。
7　暗褐色（10YR3／3）粘土。炭が微量混じる。



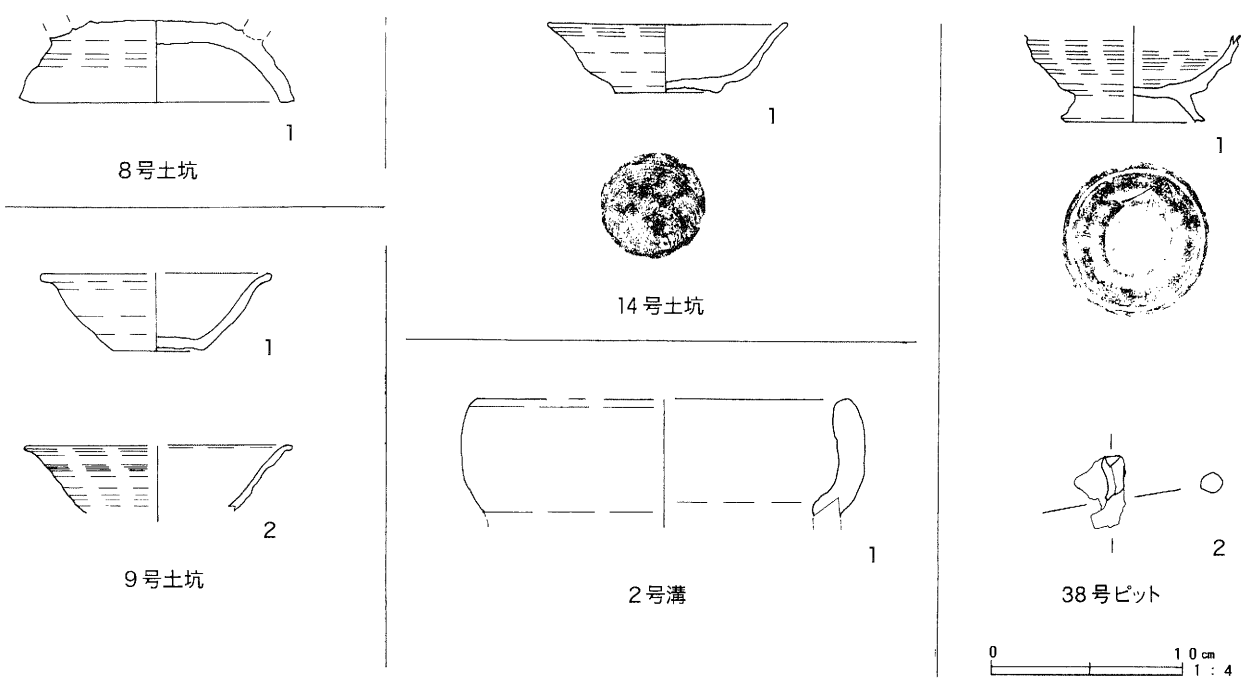


第29図　溝（1～4号）

推移している（数値は検出面での計測値であり、上端幅は1.50ｍを計る）。深さは、40cm前後（上端より）を計る。覆土は、上層から、褐灰色シルト層（10層・１号溝と同一覆土）、鉄分を多く含むにぶい黄褐色シルト層（11層）、黒褐色シルト層（13層）であり、にぶい黄褐色（12層）を挟む部分がみられる。なお、これらの上層には、やや砂っぽく、鉄分を多く含む褐灰色シルト層（４層）がみられ、３号溝上面にも堆積している（１号溝上面にも及んでいる可能性が高い）。遺物は焙烙が出土している（第30図）。

３号溝
（第 29 図）

東端はＡ－２グリッド中央において４号溝に削除されている。西端はＡ－７グリッド調査区域外に及ぶ。流れの方位は、１号溝・２号溝と同一のＮ－94°－Ｅを示す。溝幅は、狭広がみられ、0.55～0.95ｍを計測するが、大部分は80cm前後で推移している（数値は検出面での計測値であり、上端幅は1.20ｍを計る）。深さは、50cm前後を計る（上端より）。覆土は、北側と南側で異なる。北側は上層から、灰黄褐色シルト層（７層）、黒褐色シルト層（８層）、南側は上層から、鉄分を多く含む灰黄褐色シルト層（５層）、鉄分を多く含む灰黄褐色シルト層（６層）、鉄分をやや含む灰黄褐色粘土層（９層）が堆積している。上層に２号溝と共通して４層が堆積していることは、前に述べた通りである。４号住居跡を切断している。



第 30 図　土坑・溝・出土遺物

４号溝
（第 29 図）

西端はＡ－５グリッド中央において１号・２号・３号各溝を切断して構築されており、東端はＡ－１グリッド調査区域外に及ぶ。また、２号住居跡を切断している。流れの方位は、他の溝と同一のＮ－94°－Ｅを示す。溝幅は、上端は知り得ないが、1.60ｍ以上である。深さは、55㎝前後を計る。覆土は上層より、にぶい黄褐色シルト層（１層）、灰黄褐色シルト層（２層）、灰黄褐色シルト層（５層）、にぶい黄褐色シルト層（３層）、軽石粒を含む黒褐色層シルト（４層）、にぶい黄褐色粘土層（６層）、炭が微量混じる暗褐色粘土層（７層）が堆積している。遺物は、土師質高台椀、鉄釘が出土している（第30図）。

溝出土遺物
（第 30 図）

２号溝出土－１。焙烙である。口縁部のみ１／８が残存し、推定口径20.0㎝、高さ4.4㎝を計る。胎土はやや粗く、黒色、赤色、片岩、白色それぞれの粒子及び小礫を含む。焼成は普通であり、橙（５ＹＲ７／６）色を呈する。全面回転のナデ。外面一部ケズリを加える。二次加熱を受ける。

４　ピット
（第 31 図・第 32 図）

３号住居跡の周囲（第１グループ、以後1ｇと表記）、４号住居跡の東側（第２グループ、以後2ｇと表記）、４号住居跡の覆土中及び西側（第３グループ、以後3ｇと表記）、４号住居跡の西側（第４グループ、以後4ｇと表記）、７号住居跡の周囲（第５グループ、以後5ｇと表記）に区分され、総数41基が検出されている。特に、４号住居跡の周囲への集中が激しい。このうち近在するピットは、覆土が共通し、関連性を伺わせる。

灰黄褐（10ＹＲ４／２）色シルト層を覆土とするピットは最も多く、2ｇの３号、４号、５号、６号、７号、８号、10号、11号、12号ピット、4ｇの24号、25号、26号、27号、28号、29号ピット、5ｇの30号、38号、39号、40号ピットである。

にぶい黄褐（10ＹＲ４／３）色シルト層を覆土とするピットは、２ｇの１号ピット、5ｇの31号ピットである。

灰黄褐（10ＹＲ５／２）色シルト層を覆土とするピットは、２号、９号、13号ピットであり、2ｇに限られる。

暗灰黄（2.5Ｙ５／２）色シルト層を覆土とするピットは、18号、19号、21号、22号、23号ピットであり、3ｇ～4ｇにかけて位置する。
また同地域には、暗灰黄（2.5Ｙ５／３）色シルト層を覆土とする、20号ピットがある。

黄褐（2.5Ｙ５／４）色粘土層を覆土とするピットは、32号、34号、35号ピットであり、1ｇに限られる。

黒褐（10ＹＲ２／３）色粘土層を覆土とするピットは、1ｇの36号、37号ピットである。

黒褐（10ＹＲ３／２）色シルト層を覆土とするピットは、５ｇの41号ピットである。

こうした状況を、グループ毎にみると次のようになる。

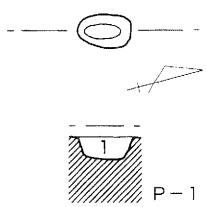
第１グループ　　1ｇには、黄褐色粘土層を覆土とする32号、34号、35号、黒褐色粘土層を覆土とする36号、37号ピットがある。いずれも粘土層を覆土として、共通点もあるが、形態・間隔・位置等に共通性がなく、単独ピットであるといえる。また、３号住居跡との共通性も見出だせない。

第２グループ　　2ｇには、にぶい黄褐色シルト層を覆土とする１号、灰黄褐色シルト層を覆土とする、３号、４号、５号、６号、７号、８号、10号、11号、12号、僅かに薄い灰黄褐色の２号、９号、13号ピットがある。共通する覆土のピット間で間隔・位置等に共通性がなく、小ピットが群在するものといえる。

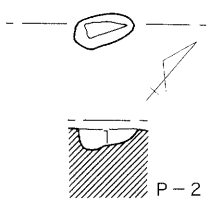
第３～４グループ　　3ｇから4ｇには、暗灰黄色シルト層を覆土とする18号、19号、21号、22号、23号、僅かに薄い暗灰黄色シルト層を覆土とする20号、灰黄褐色シルト層を覆土とする24号、25号、26号、27号、28号、29号ピットがある。４号住居跡内に所在する14号、15号、16号、17号ピットは、24号ピット等と同様の灰黄褐色シルト層を覆土としいるが、住居跡覆土との区別がほとんどつかず、床面付近で確認されたものである。５号土坑と共通し、時期的にも平行するものと思われる。ただし、第２グループと同様、共通する覆土のピット間で間隔・位置等に共通性がなく、小ピットが群在するものといえる。

第５グループ　　5ｇには、灰黄褐色シルト層を覆土とする30号、38号、39号、40号、にぶい黄褐色シルト層を覆土とする31号、黒褐色シルト層を覆土とする41号ピットがある。相対的に12～15号土坑との間に共通性があり、時期的にも平行するものと思われる。

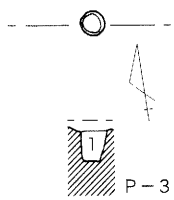
ピット出土遺物
（第 30 図）　　38号ピット出土－１。土師質高台椀である。底部付近のみが残存し、底径7.8cmを計る。胎土は細かいが、白色、黒色、赤色それぞれの粒子を多く含む。焼成は良く、堅い。橙（2.5ＹＲ６／６）色を呈する。ロクロ整形。底部は糸切後付け高台。
38号ピット出土－２。鉄釘である。残存長3.8cmを計る。



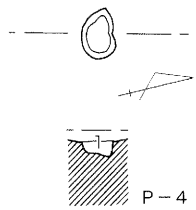
1号ピット土層
1　にぶい黄褐色（10YR4／3）粘土質土。



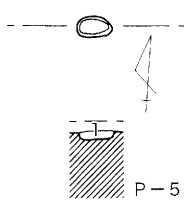
2号ピット土層
1　灰黄褐色（10YR5／2）砂に近いシルト質土。

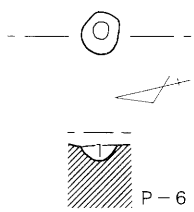


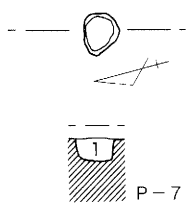
3号ピット土層
1　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質土。

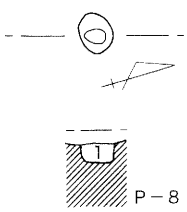


4号ピット土層
1　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質土。

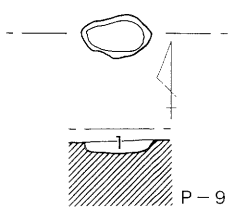




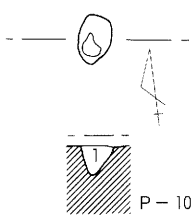


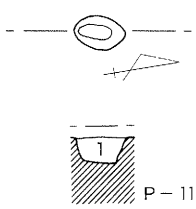


5・6・7・8号ピット土層
1　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質土。

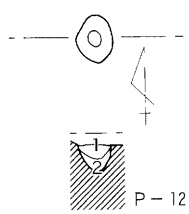


9号ピット土層
1　灰黄褐色（10YR5／2）シルト質土。砂が混じる。

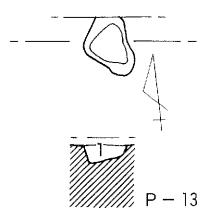




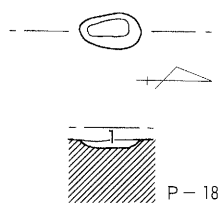
10・11号ピット土層
1　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質土。

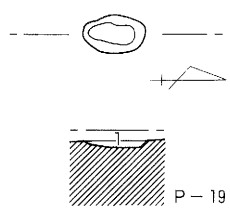


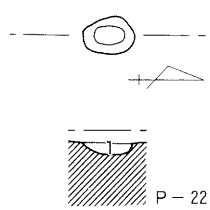
12号ピット土層
1　にぶい黄褐色（10YR5／3）粘土に近いシルト質土。
2　灰黄褐色（10YR4／2）粘土質土。



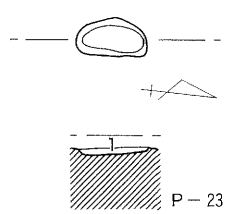
13号ピット土層
1　灰黄褐色（10YR5／2）粘土に近いシルト質土。鉄分のブロックが混じる。

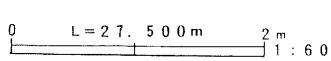




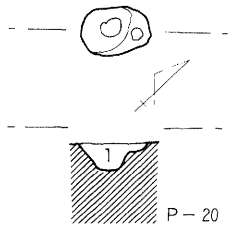


18・19・22・23号ピット土層
1　暗灰黄色（2．5Y5／2）シルト質土。帯状・ブロック状の酸化鉄が混じる。

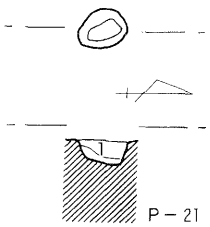




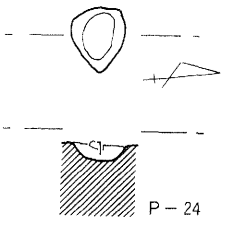
第31図　ピット　1

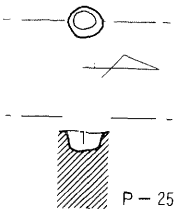


20号ピット土層
1　暗灰黄色（2．5Y5／3）シルト質土。酸化鉄のブロックが若干混じる。

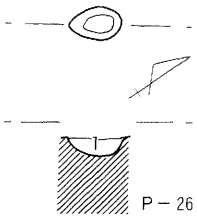


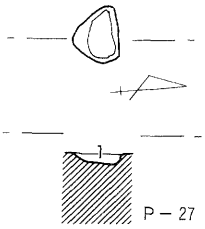
21号ピット土層
1　暗灰黄色（2．5Y5／2）シルト質土。
2　褐色（10YR4／4）シルト質土。やや粘性強い。

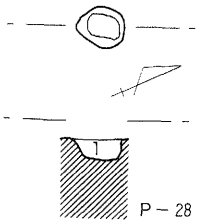


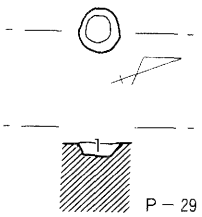


24・25号ピット土層
1　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質土。

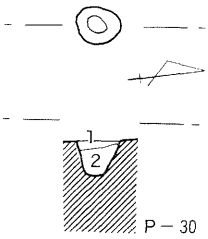




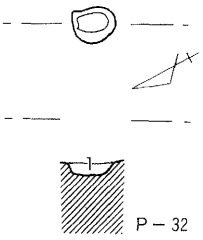




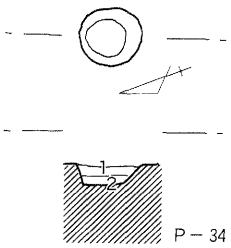
26・27・28・29号ピット土層
1　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質土。

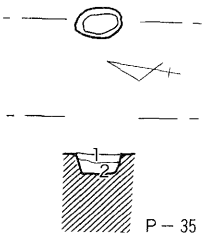


30号ピット土層
1　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質土。
2　黒褐色（10YR3／2）シルト質土。1層より粘性強い。

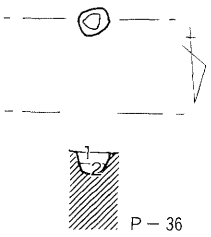


32号ピット土層
1　黄褐色（2．5Y5／4）やや砂質土。

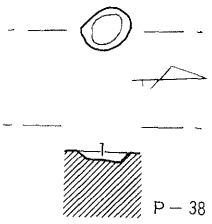




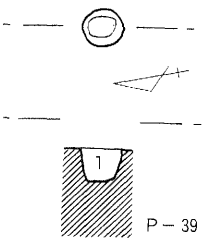
34・35号ピット土層
1　黄褐色（2．5Y5／4）土。粘性あり。
2　黄褐色（2．5Y5／4）土。基本的に1層と同質だが、やや砂質。



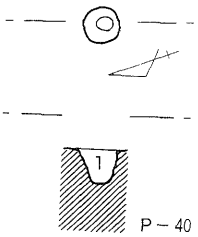
36号ピット土層
1　黒褐色（10YR2／3）土。ローム粒子・炭化物（多量）混入。
2　オリーブ褐色（2．5Y4／4）土。ローム粒子（多量）混入。



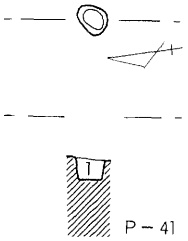
38号ピット土層
1　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質土。



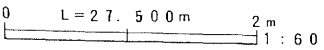
39号ピット土層
1　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質土。
にぶい黄色（2．5Y6／4）土がブロック状に少量混じる。



40号ピット土層
1　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質土。



41号ピット土層
1　黒褐色（10YR3／2）粘土に近いシルト質土。



第32図　ピット　2

V　調査のまとめ

検出された遺構

前章まで述べてきたように、奈良東耕地遺跡の今回の調査においては、遺構内覆土と基盤層との差が、ほんの僅かであって見極めが困難であり、６号住居跡のように、カマドの存在が知れて初めて、住居跡の存在が確認されたものもあった。しかしながら、住居跡７基、土坑22基、溝４条、ピット41基が検出され、大きな成果が挙げられたと思われる。

住居跡

総数７基が検出された住居跡のうち、２号・４号住居跡の２基は、溝によって削除されていて、形態も不整形であった上、カマドも検出されていないが、床面が安定していること、形態も長方形を基本としたものであること等から、一応住居跡としたものである。また、１号・７号住居跡の２基は、調査区域外に及び、その全貌が知れなかった。さらに５号住居跡は、旧住居跡埋没後、各辺ほぼ同率で拡張され、新住居跡が構築されているが、カマドの設置位置は完全に一致しており、同一住居の拡張とした。

しかしながら、検出された住居跡を統括的に観察すると、長方形を基本とする形態をとること、確認されたカマドが全て東辺に構築されていること、主軸方位がN－80°－EからN－101°－Eの範囲内に集中すること、床面上に柱穴が検出されていないこと等の共通点が見出される。このことから、カマドの検出されていない１号・２号・４号住居跡のうち、少なくとも１号住居跡については、東辺に構築されていた可能性が高いといえる。

カマドは、燃焼部を竪穴内に設けている３号・５号（旧）・５号（新）住居跡と、燃焼部を竪穴内に設けず、竪穴外に全て張り出す６号・７号住居跡に区分される。

覆土は、大部分がシルト質であり、色調は黄褐色を基調として、ほぼ共通していた。そして、下層ほど砂を多く含むという特徴もみられ、この砂を多く含む土層は、鈍い黄褐色シルト層（２号・４号・５号旧住居跡）、鈍い黄橙色土（３号住居跡）という共通性もみられた。また覆土上層には、灰黄褐色シルト層中（１号・４号住居跡）、鈍い黄褐色シルト層中（２号・５号新住居跡）等、鉄分を含む層も共通してみられ、各住居跡間の時間差がほとんどない状況がみられた。

土坑

22基検出された土坑は、覆土等によって区分される。

鉄分を多く含む覆土で共通性をみせたのが、灰黄褐色シルト層を覆土とする１号・３号・４号・５号土坑のグループである。他には、黄褐色シルト層を覆土とする２号土坑、鈍い黄褐色シルト層を覆土とする９号土坑、黄色シルト層を覆土とする15号土坑、黄橙色シルト層を覆土とする16号土坑、鈍い黄色粘土層を覆土とする19号土坑がある。

１号・３号・４号・５号土坑グループの覆土である灰黄褐色シルト層は、３号溝覆土の５層と同一であり、３号溝と同時期と考えられる。

各住居跡と共通する灰黄褐色シルト層を覆土とする土坑は、６号・７号・９

号・10号・11号・12号・13号・14号・19号土坑である。また、15号土坑の鈍い黄色シルト層は、１号住居跡覆土と共通する土層である。

鈍い黄褐色シルト層を覆土とする土坑は、８号・17号・18号・20号・21号土坑であり、１号住居跡及び５号新住居跡覆土と共通する土層である。このうち、下層が暗灰黄色シルト層で共通する土坑は、８号・17号・20号・21号土坑である。また、18号土坑下層と共通の黄褐色シルト層を覆土とする土坑は、22号土坑である。

２号及び16号土坑の鈍い黄褐色シルト層は、共通する土層であるが、他の遺構に共通する土層は、確認できなかった。

溝

４条検出された溝のうち、１号・２号・３号溝は、重複関係から、１号・３号溝（古）→２号溝（新・焙烙出土）の関係が知れるが、時期差はほとんど無いものと考えられる。４号溝は、これら三溝を切断して掘削されており、最も新しい溝であることが知れる。また４号溝覆土中には、浅間Ａ火山灰が包含され、その下限とされた。

ピット

ピットは、総数41基が検出されており、所在地により５グループに区分されたが、まとまりをみせるものがなく、小ピットの群在という認識に止まった。

検出された遺物

１号住居跡から刀子２点と紡錘車、２号住居跡から刀子、３号住居跡角釘２点、５号新住居跡から角釘３点、７号住居跡から方形環状鉄製品、38号ピットから角釘と、ほとんどの住居跡から鉄製品が検出されており、大きな特徴を示している。なかでも、１号住居跡から検出された紡錘車は、弾車の下位が折れ曲がっているものの完存しており、良好な資料となろう。また、７号住居跡から検出された方形環状鉄製品は、土器群及び馬歯と共に一括投入された状況を呈しており、特に馬歯と強い関連性を伺わせている。あるいは、馬具の一部であろうか。

土器類は、僅かに還元炎焼成を残す須恵器の杯と、還元炎焼成を伴わない土師質の杯が混在しており、後者の比率が高くなっている。また、３号住居跡で検出されたような内黒高台椀も伴っている。さらに、５号新住居跡でみられるように、灰釉の割合が多いことも特徴の一つとなっている。甕類は、すべて肩部に丸みをもつ土師器甕であり、羽釜は検出されていない。

結語

当地は、『奈良』という地名が示す通り、厚い堆積土に覆われた真っ平らな沖積低地帯であり、地表面の観察からは遺跡の認知が困難な土地であった。そのため、地表に突出した古墳の存在は知られていたものの、集落遺跡はほとんど知られていなかった地域でもあった。

こうした土地において、これまで述べてきたように平安時代の単純遺跡が検出され、その在り方が示されたことは、古代から『奈良』という地が果たしてきた多くの役割を考える上で、一つの大きな成果が得られたものと思われるのである。

調査にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

写　真　図　版

遺跡航空写真（北より）

遺跡航空写真（西より）

図版２

調査開始前の状況（東より）

発掘調査風景

発掘調査風景

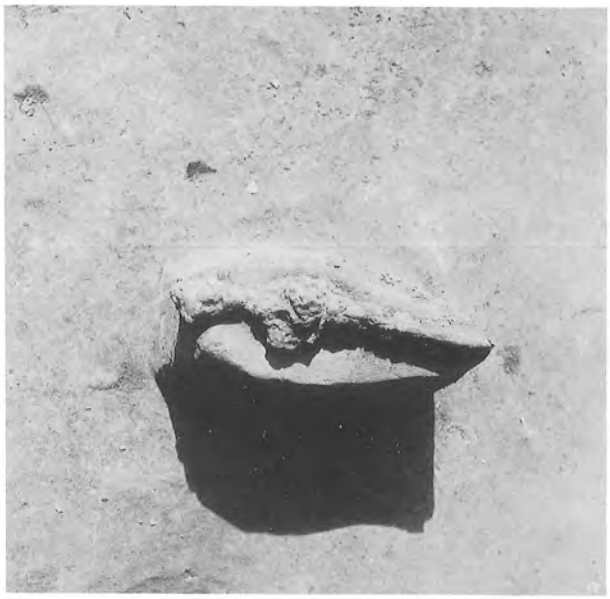
1号住居跡

2号住居跡

4号住居跡

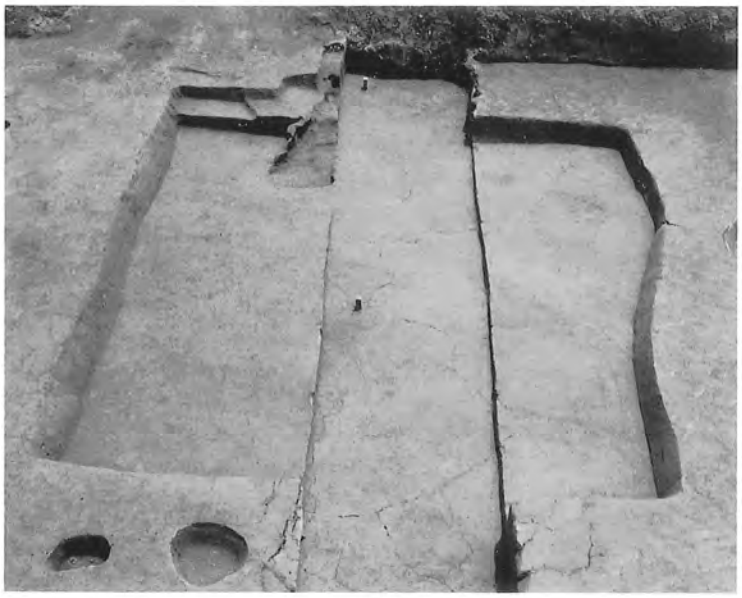
図版４

１号住居跡鉄製紡錘車出土状況



１号住居跡鉄製刀子出土状況

１号住居跡鉄製刀子出土状況

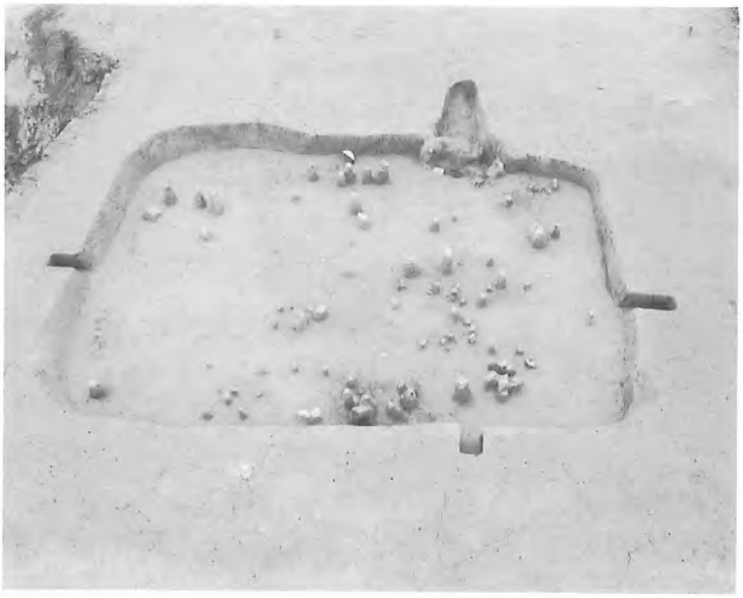


３号住居跡

３号住居跡カマド

３号住居跡カマド周辺遺物出土状況

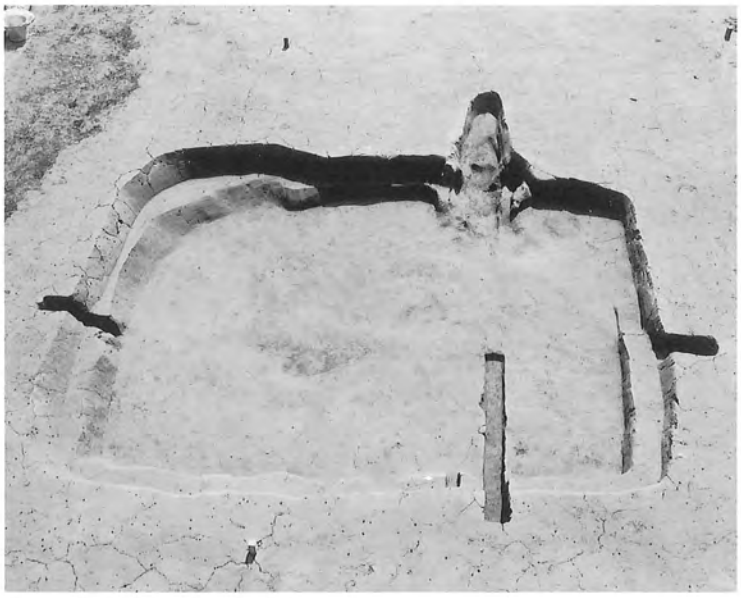
図版６



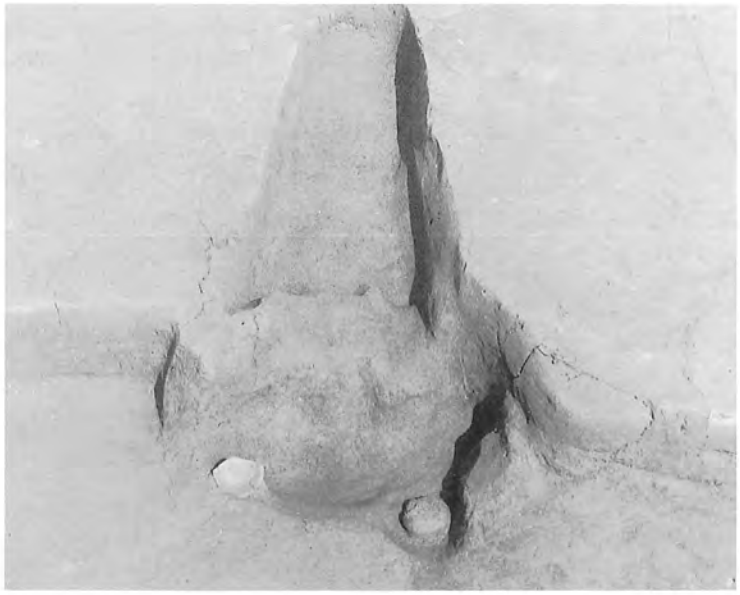
５号住居跡（新）

５号住居跡カマド（新）

５号住居跡灰釉（№２）出土状況



５号住居跡（旧）

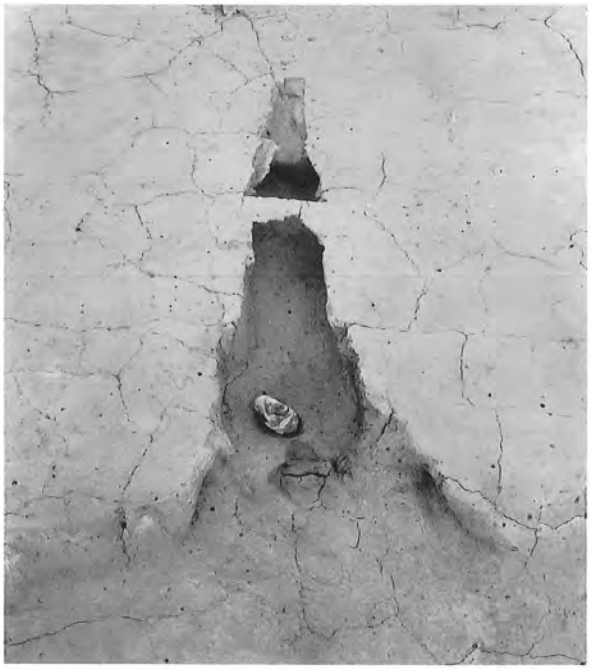


５号住居跡カマド（旧）

ピット第２グループ

図版８

６号住居跡



６号住居跡カマド

ピット第４グループ

７号住居跡

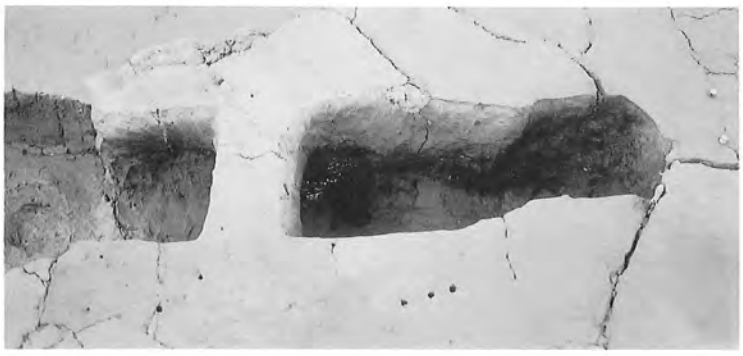
７号住居跡遺物出土状況

７号住居跡環状鉄製品出土状況

図版10

７号住居跡カマド

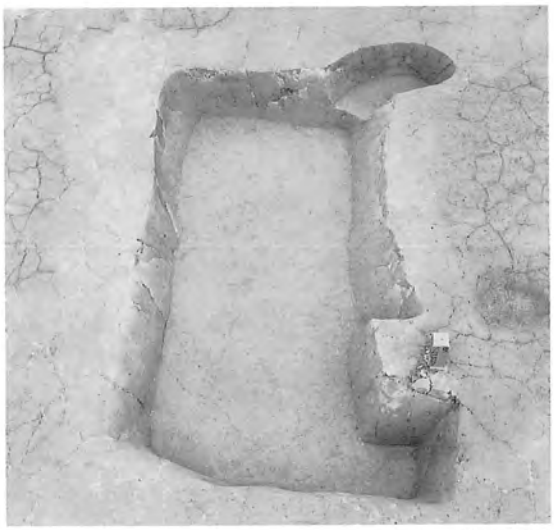
７号住居跡カマド



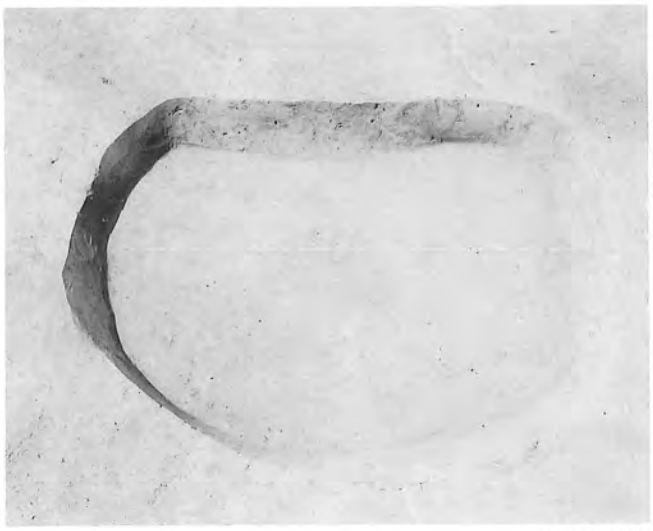
７号住居跡カマド（煙道）

2号土坑

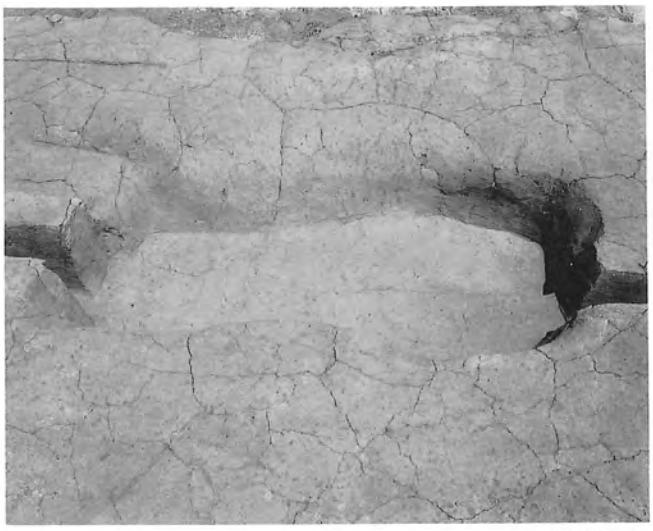
17・18・19号土坑



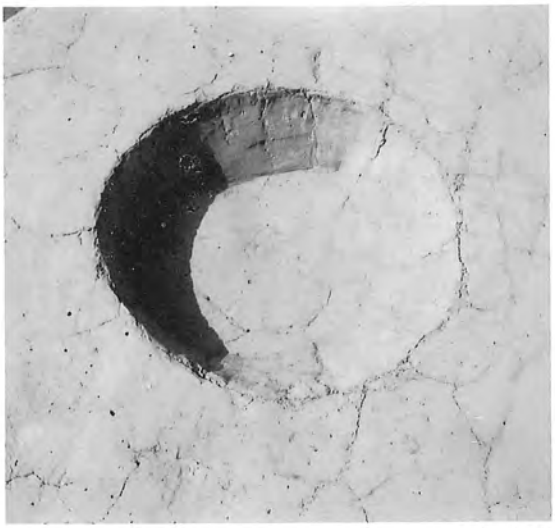
7・8号土坑



20号土坑



11号土坑



21号土坑

図版12

1・2・3号溝

4号溝

ピット第５グループ

38号ピット

14号土坑

15号土坑

1号住居No.2

3号住居No.3

1号住居No.4

5号住居No.2

2号住居No.1

5号住居No.3

2号住居No.2

5号住居No.7

5号住居No.8

6号住居No.1

5号住居No.9

7号住居No.1

5号住居No.10

7号住居No.7

5号住居No.11

7号住居No.8

7号住居No.9

14号土坑No.1

9号土坑No.1

38号ピットNo.1

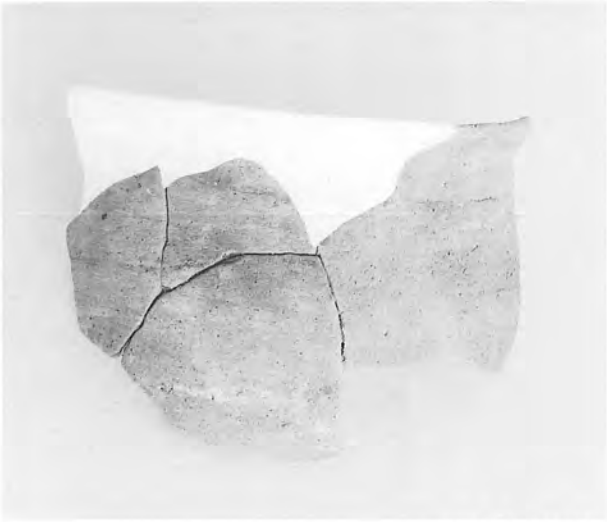
4号住居No.2

3号住居No.4

7号住居No.12

7号住居No.17

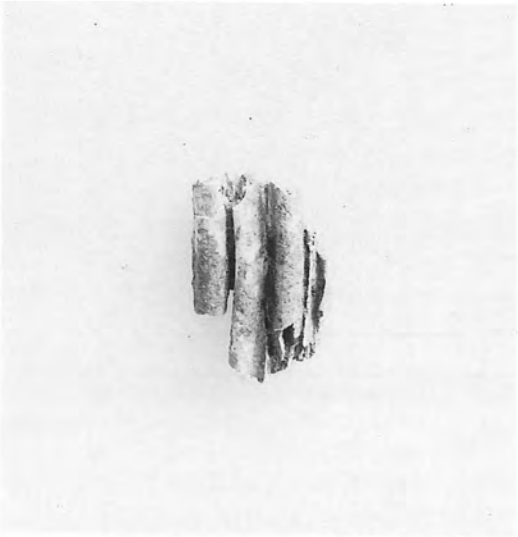
7号住居No.13



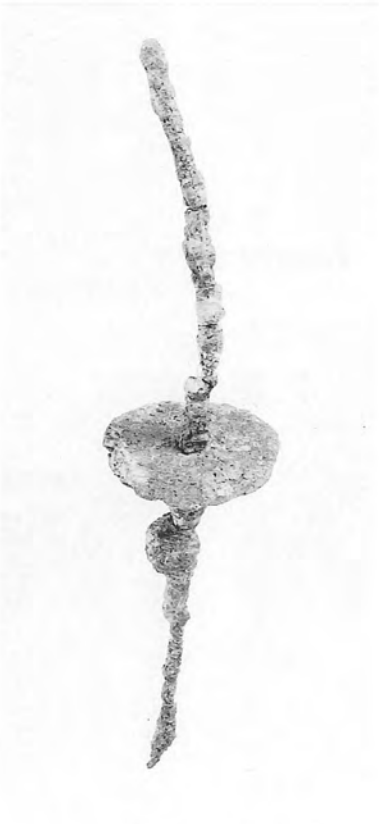
7号住居No.18

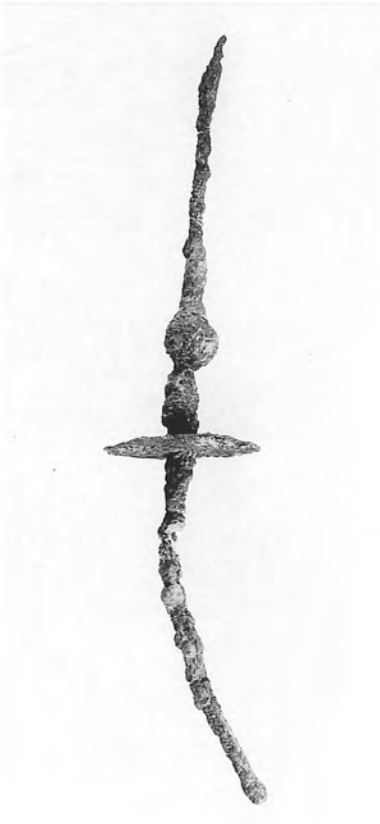
7号住居No.15

7号住居No.19



7号住居　馬歯





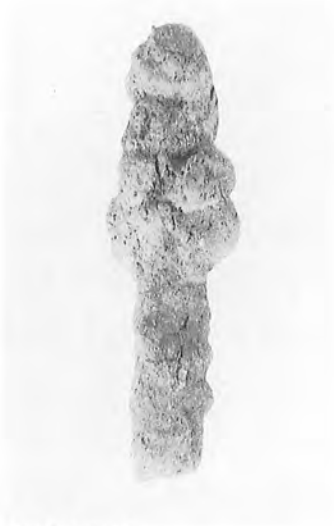
1号住居No.7

7号住居No.26

2号住居No.3

1号住居No.8

1号住居No.9



3号住居No.6

5号住居No.21

3号住居No.7

5号住居No.22

5号住居No.20

38号ピットNo.2

報告書抄録

ふりがな	ならひがしごうちいせき
書名	奈良東耕地遺跡
副書名	平成12年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	寺社下　博
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会
所在地	〒360-8601　埼玉県熊谷市宮町2-47-1　TEL048-524-1111
発行年月日	西暦2000（平成12）年9月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯（°′″）	東経（°′″）	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
奈良東耕地遺跡（ならひがしごうちいせき）	埼玉県熊谷市（さいたまけんくまがやし）大字中奈良897（おおあざなかなち）	11202	119	36°11′16″	139°22′49″	19990412～19990531	800	農業活性化センター建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
奈良東耕地遺跡	集落跡	平安時代 古墳時代	住居跡　7 土坑　22 ピット　41	土師器、須恵器、土師質土器、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄製品（紡錘車、刀子、角釘）、土錘	未調査地域での集落遺跡の初調査であり、住居跡内より、鉄製紡錘車、灰釉陶器などが良好な状態で出土した。
		近世	溝　4		

平成12年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

奈 良 東 耕 地 遺 跡

平成12年9月30日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／関印刷株式会社

さくらのまち“熊谷”